

転生者の復活記～死にぞこないの物語～

バトルマニア（作者）

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

これは異世界に転生した主人公が、多くの強敵と戦いながら少しづつ力を取り戻していく物語。ただし本人に自覚はない。

アイデア、キャラ募集始めました。詳しくは活動報告でお願いします。

目 次

転生者の復活記 簡単設定集（ネタばれあり）

転生できるらしい

ステータス設定……のはずが

スキル設定

転生できた

起きたら……

異世界掲示板

あれから……

システムとの会話

成長と戦闘準備

スライム討伐！

夢？

全く上がらん……

ゴブリン討伐

魔導を使おう

一年の成果

更に三か月

戦いだ

準備完了

風龍戦

夢の続き

仲間が欲しい……よし作ろう！

スライムが、仲間になつた……はず

何とかなつた。

これから的事

さあいざ山脈へ！

狼戦

森の中、山脈の麓

完璧無欠の家が出来たぞ！

森の探索

小鬼たち

夢だ

村だつたぜ

あれから一か月

あれから三か月

転生者の復活記 簡単設定集（ネタばれあり）

・世界観について

転生者のせいで中途半端に技術力が高いが、基本的に未開拓地や発展途上の場所が多い異世界ファンタジー。大きく分けて人間族、亜人族、魔人族の三種族が人類をしており、各自で独自の力を保有している。

因みにだが、この世界は『転生者の放浪記』の1000年後の話で、『異能学園の用務員』の色々あつた約1万年後の話もある。

・システムについて

この世界の意思であり、世界を維持管理するための存在。滅びないことが最優先事項な為、そのためなら手段を選ばず何でもする。なおシステムが運営しているステータスは、すべての存在の成長進化の促進を目的にされているが、認識自体は一部の者にしかできない。

・管理者について

世界を管理する者のこと。本来は世界の意思が担当するものだが、特例で別の者が管理者をしている。

現在の管理者は、迷宮神 メイズという者が世界の管理を行っている。この星に張り巡らされた迷宮の神であり、同時にこの星の神の頂点である。とは言え、世界の意味方世界が認めた正式な神は現在彼女しかいないし、彼女は神として振舞う気はない。そもそもは一万年前に無理矢理神にさせられただけなので当然である。部下として、各地の『迷宮主』や『大海の支配者 リヴィアイアサン』などがいる。

・人類種について

人間族……特殊なこと以外何にでも適性がある。主に生命力といふ名の気力などを扱い、基礎能力を強化できる。魔法などは苦手で、それを技術にまで落とし込んだ術式をよく使う。因みに術式は暗記

科目なので覚えれば誰でも使える。

魔人族……基本的に能力も高く主に魔力を使うことから、特に魔法系統に優れている。魔族と言つても様々な種族があり、人間そつくりな魔人から吸血鬼や妖精、アラクネなど魔力を主体とした者たちの総称。

亜人族……上記の二種族以外の各種族ごとに特殊な能力を持ち合わせて いる者たちの総称。獸人や龍人や鬼人、森人^{エルフ}や矮人^{ドワーフ}など種類が豊富。基本的な主力が氣力か魔力以外の使い手の集まり。

・魔物について

魔物と言われているが、実際のところは色々な魔物や妖怪などまとめてそう呼んでいるだけで、その種類は結構多い。主には使用する力の違いによつて分けられている。自然生成されるものと、生物的に生まれるものがある。

・力の種類について

氣力……主に人間が使う、基礎能力を底上げしてくれる力。身体能力はもちろん、感覚が優れたり、回復力が上がつたり、視力がよくなつたり、耐性が高くなつたり、思考速度が上がつたりする。

魔力……主に魔人族が使う、魔法などを使うための力。万能性があり、あらゆる想像物に対応して変質してくれる性質がある。ただし再現できるというだけで、各分野の得意性質には劣る。

獸力……主に獸人族が使う力。氣力の上位互換的な力で、無意識や本能と言つた方に強く作用する。ただし反動が大きく疲労がたまりやすい。

鬼力……主に鬼人族が使う力。氣力の上位互換的な力で、特に肉体強度が高くなる。ただし気持ちが高まりやすくなり制御が難しい。

靈力……主に精靈^{エルフ}や森人^{ドワーフ}や矮人などが使う自然の力。周囲の力を利用したりできるが、体質に合わない力を使つたり取り込んだりすると体調を崩す。

龍力……主に龍人族が使う力。氣力の上位互換的な力で、変化しに

くいため耐性面に優れている。ただし、汎用性に乏しく、自身が持つ属性に力が特化される。

妖力……変化の力。魔力の上位互換的な力で、多様性に優れている。ただし、大雑把に使うことを想定されているため、細かい調整が非常に難しい。

呪力……負の力。攻撃性や陰湿性が強く出る。回復などには使えない。

聖力……あらゆるものを見事に消滅させる聖なる力。その最終形態は、絶対的な消滅の力。

邪力……攻撃性と暴力の塊。ただただ破壊に特化した力。

神力……他の力の良い所を取りとした強力な力。または他の力と組み合わせることで強くなる力。万能に見えるが、それは基準が高いだけではなく、使い手によって偏りができる。あと格の低いものには負荷が大きすぎるのが難点。

源力……世界に漂うエネルギーそのものであり、あらゆる力や元素などの原型。これを合成したり組み合わせることであらゆる力や物質を生み出している。神力の上位互換的なもの。超越者以上でないと認識すらできず、扱うとなればその中でも上位の実力が必要。

・スキルについて

スキルには通常スキルと特殊スキルがあり、前者は誰でも取得可能で、後者は才能が大きな容量がないと取得できない。能力の拡張と成長を早めるための補助機能であり、基本本人の才能を少し超えた程度でしか効果がない。なので、持っていないからできないなどと言うことはない。有利なだけである。

特殊スキルの例　能力などを真似て作つたもの、またはそれの補助機能。

憤怒、暴食、怠惰、強欲、色欲、嫉妬、傲慢など

通常スキルの例　強化系、技術系、情報系の三種類

最上位スキル　各分野で統合され、剣士や斥候、術者など職業のようになつたスキル

上位スキル さらに統合され特化したスキル 対物理など

中位スキル 統合され性能が向上したスキル 衝撃耐性など

下位スキル 単一の効果しかないスキル 打撃耐性など

※特殊スキルやスキルに表示されない魔法などは、超越者になる事により適した能力や種族能力になりますが、それは世界にとつて都合が悪いので、作中では秘匿されています。

・レベルについて

1～100まであり、レベルが上がるごとに基礎能力が引き上がる。この数値が高いと一部のスキル取得や成長が早くなる。以下はレベルの目安。十段階評価だが、スキルレベルも似たようなもん。

1～20レベル 年齢と共に上がる範囲のレベル。大人になれば20レベル前後は当たり前になる。

20～50レベル 一般人の上げられる限界。同時に戦闘に身を置く者のスタート地点。

50～80レベル 下位から上位の探索者や戦士。自然生成される魔物の限界レベル。

80～90レベル 世界でも有数の実力者。才能はもちろん経験や技量なしではたどり着けない。

90～100レベル 最上位の探索者や迷宮の最奥にいる一握りの強者。

・超越者や超越種について

レベルを超えて、ステータスを必要としなくなつた眞の強者。システムと切り離されてなおその強さと可能性は衰えることはない。現在人間界には、過去最高人数である人類側 魔物側共に10人程度の計20人前後はいる。裏世界にはその数倍の勢力がうごめいている。

・簡単な強さ順について

レベル持ち～カンスト勢（超越者）≤システムまたは管理者の順で強いです。特に最強格の超越者たちは、システムや管理者と言われる存在を困らせる程度には強いです。

・多元存在について

超越者が極まれになる存在。本来の正常な世界では生まれないイレギュラーであり、その力は超越者と一線を引くほど。この世界は厄災の襲来によりその発生率と可能性が異常に高くなっているが、それでも人間界では傾向が見える者が数人、最果ての大陸でも最上位の支配者層ぐらいしかない。

・能力について

システムとは関係がない所有者本来の特殊な力。スキルを超えた性能を誇るが、その方向性は個人次第。

・転生者について

一定以上の魂の強度を持つ者たちが、運よく生まれ変わった存在。何かしらの能力か、高いスペックを持ち合わせている。

・神について

神格を持つ者たちの事。神格とは、一定以上の存在格を持つた状態で、信仰心などが集まればできるもの。これから生まれた力が神力であり、誰がどれだけどう信仰するかによつて力の性質がかわる。一度神となつたら信仰する者がいなくなつても神のままである。また神力を受け継いだものを神族、与えられたものなら神造物などと言つたりする。

・精霊について

自然の精霊が基準で、実はそこら中にいたりする。だが殆どが人間に感知できないほどの微弱な存在で、力を持つても自我を持つ個体は上位勢であり、非常に少ない。精霊と契約したり、力を借りたりして靈力や靈術が使える。魔素汚染されると薄い自我を持つたり能力が上がるが、妖精などと言つた魔物になる。

・勇者について

勇者は対魔物用や対魔王用と言つた感じの存在。それ以外だともはや戦略兵器と化しています。上位の特別な武器には意思が宿り、長

い年月と経験で自我が芽生えることがあります。勇者のなり方は、自
我のある特別な聖剣や神剣に選ばれねばなりません。

・魔王について

人類外から生まれる強力な魔物。それが多くの群れを率いたらで
きる者たち。基本的に魔物の延長線上なので、人類ほどの知性知能
自我などと言つたものは持ち合わせていないが、極まれにそれらを獲
得する者たちがいる。

・等級や特殊な武器や道具について

武器や道具などには等級というものがあり、一番上が特級で、そこ
から一級～五級と評価されている。これはシステム側の評価で、シス
テムの存在を知らない大半の人類は、所持していれば無意識で解析や
鑑定などを使ってなんとなくわかる者たちもいる。それを基準にして
て様々な等級が決まっている。

またこの世界には、基礎能力強化や属性付与などの魔法や術式の刻
まれた武具が出回っているため、余程特別な武器でないと聖剣や魔剣
などと呼ばれない。これは迷宮で產品されるものや天才や神などが
作つたもの、特別な経緯でできたものを解析してできたものが、劣化
模倣で量産できるようになつたからでもある。

呪いや負荷が大きいもの 対価が必要な武具のことを代償武具と
言つた括りでまとめられている。これらはどれも強力で、最悪身を亡
ぼすことを覚悟すればどんな武器兵器よりも上を行く。

・厄災について

害悪の頂点にして、あらゆるもの敵。この世界の悪いことは半分
ぐらいこいつのせい。状況の悪化を含めればほとんどこいつの仕業
とも言える。ある程度力を取り戻すまで探知するのが非常に困難な
のと、宿主に知恵や力を与えて人の能力や欲望を増大させたり、魔物
たちを狂暴化させたりと厄介極まりない。こいつの排除のために世
界の意思や人類は約一万年も奮闘しているが、どの時代どの文明も完
全に殺し切ることができずに翻弄し続けられている。その原因は、厄

災が毎度自身の情報を曖昧にしているからでもある。

また1000年に一度のペースで本格的な復活をしており、それは数を重ねるごとに力を増している。敵としてどんな世界にも簡単に出せるお手軽キャラ。

- ・列強国について

人間界側の世界でも飛びぬけて強大な国力を持つ国。

- ・魔大陸を制覇した帝国、大魔帝国。

本名 マクロニア帝国。魔導を使つた高度な文明を築く帝国。帝国を八方位で守る王たちがおり、戦力や技術力と言つた国力において隙が無い。

- ・亞大陸を制覇した国家、天妖亜國。

本名 天妖亜國。自然よりな特徴があるため文明の進み具合は最も遅いが、多種多様な種族によるフィジカル面では最強クラスの國家。各種族のトップが集まつて物事を話し合つている。

- ・中央大陸最大の大国、中央合衆国。

本名 アリウス合衆国。様々な種族が多く暮らす大国。探索者組合や商業者連盟、技術者協会などの組織の大本営がある国であり、経済において右に出る国は存在しない。

- ・もつとも平和な小国群、護国連合。

本名 フリー・デン連合。周囲を囲む四つの国と、中心にある美神と言われる神が治める国からなる中央大陸からはみ出した半島国。元は危険で荒れた大地だったが、数百年前に美神が住み着き今の形になつた。様々な種族が住み、平和そのものの理想郷とも言われている。

- ・複数の島々からなる国、諸島連邦。

本名 シーエリア連邦。普通の人類に加え、水や空に関わる種族が多い国。世界最強の海軍を保有しており、現代兵器に似た兵器を多く生産している。

- ・主な各大陸や島々について
- ・魔族が多く暮らす、魔大陸。

地図で言う右上ら辺にある大陸。魔力関係の資源が豊富。それにより魔導などが発展している。魔力に汚染された、魔化してしまった種族が多いともいう。

- ・亞人が多く暮らす、亞大陸。

地図で言う左上ら辺にある大陸。龍人や鬼人、精霊や獸人など魔素とは違う力を使う特殊な種族が多い。純潔とも言われている。

- ・人間が多く暮らす、小大陸。

地図で言う左下ら辺にある大陸。最も小さい大陸で、いまだ統一されず争いが多い大陸。人間を中心とした国家が非常に多い。

- ・最も大きく多様性のある、中央大陸。

地図で言う中央にあり赤道の上でアフリカ大陸を横にしてちょっと歪み伸ばした感じの巨大大陸。中央にあることから、様々な種族がここに集まつてくることで有名。中央合衆国があるため大きな争いは起きないが、小さい争いならちらほら起つてている。

- ・複数の島々が広範囲に点在する、諸島群。

地図で言う、赤道付近でそこそこ広範囲に点在する島々。迷宮資源と海底資源が目立つ。技術力が高く情報網を引きまくっている。

- ・世界三大危険地帯について

迷宮以外の超危険地帯。高密度なエネルギーのせいで迷宮が設置できず、最上位の迷宮の最奥や裏世界に迫る程の危険地帯とかしている。またトップ3と言うだけで、ここ以外にも危険地帯は複数ある。

- ・中央大陸にある、深淵郷。

世界の中心、そこに存在する大穴とその周囲の歪んだ世界。莫大なエネルギーにより空間や次元自体が歪んでおり、常に少しづつ変動し続ける空間の大きさや座標のせいで地図が当てにならない。時より大きく動くがあるので要注意。

- ・魔大陸にある、暗黒樹海。

中心に存在する魔界樹の影響で、少しづつ広がり続ける薄暗い樹

海。魔界樹が発する莫大な魔素により、周囲の生物は異常発達しており、植物たちは絶えず成長し続けている。現在、大魔帝国がその進行を食い止めている。

・亞大陸にある、神秘領域。

世界最大の聖域であり、神や神聖なものが存在すると言われる領域。現にそれらしいものも数多く確認されており、靈力や神力などの力も検出されている。

・十七英雄について

十七人いる大英雄。基本人類の味方であり、国家や組織の味方ではない。戦闘力に限らず、人類に大きな貢献をした者たちなので、全員が強いわけではない。厄災と因縁のある者が多く、厄災を完全に討ち滅ぼすために生まれたと言つても過言ではない。

・死徒十三席について

好き勝手に生きる十三人の危険人物の集まり。トップがまとめ上げていることもあり全員知り合いはあるが、仲間意識があるわけではないので争うことしばしばあり、その度に被害が大きい。過去の厄災が自身の隠れ蓑として作った組織が、厄災討伐後も残った產物。

・亜神教について

人工または異界の神を呼び出そうとする集団。指揮しているのは死徒十三席の一人であり、目的は唯一神の創造で、他の神の排除活動も同時進行で行っている。死徒十三席経由で厄災を顕現させようとして作った組織。1000年前に失敗して以降厄災としてはその役割は終えているのだが、残った信者が厄災にそそのかされた『平和な世界』を求めて今の形態になつた。

・七災魔王について

複数存在する魔王の中のトップ集団。人類との関係は良好～最悪まであり、魔王同士でも争うことも珍しくない。七災魔王とは、魔王

の中で最強格であること、現在暴れているだけではなく、過去の実績や潜在的な危険度で選ばれている。人類同様厄災のことを危険視しており、どんなに関係が最悪でも厄災討伐の時だけは協力する。その後は知らん。

・四凶神について

悪神、邪神、禍神、災神の四人の神。正式な神ではないが、神性を保持しているトップ層で超が付くほどの危険人物たち。最低でも超越者級の実力を誇る。あらゆる存在にとつて毒にも薬にもなる存在で、普段は気ままに生きているが、その内情は厄災を滅ぼすために何千年も生きている者たち。

・探索者組合について

迷宮や危険地帯などで活動する者たちが所属し、生存力が高く戦闘では対魔物などに長けており、その他採取や雑用、商隊の護衛など様々な仕事もこなしている。厄災が出た際は、他の組織と協力して速攻で動いてくる。

・商業者連盟について

商人たちの集まりであり、あらゆる経済を実質的に牛耳っていると言つていいくほどの勢力である。だが彼らの目的はバランスを保つためというのが大きく、余程のことがない限り表立つて活動しない。厄災が出た際は、他の組織と協力して速攻で動いてくる。

・技術者協会について

技術の発展や保護を目的とした集団である。自由なやつが多いため、詳しく何をやつてているのかは謎。所属組織には、魔女会や三賢者などがある。厄災が出た際は、他の組織と協力して速攻で動いてくる。

・迷宮同盟について

メイズをトップとした迷宮主たちの集まり。迷宮は世界維持のためにノルマがあるので、その管理と報告のために作った組織。一応迷宮主たちのコミュニケーション広場として役立っている。厄災は見つけ次第、欠片すら残らず排除対象。

・最果ての大陸について

世界の裏側、メイズの住む大陸。南北のアメリカ大陸を歪ませたような形のメイズの迷宮そのもの。強大な力を持つ魔物が数多く闊歩しており、人類どころか知的生物自体が極端に少ない。この大陸は、幾度とない力のインフレにより人類では手出しができなくなってしまっている。それにより厄災を完全に駆除できたが、その代わりにこうなってしまった。現在の主な目的は、メイズのストレス発散と世界運営用のエネルギー生産所と化している。

・裏世界最強格について

最果ての大陸に属している各地のトップであり支配者。一体一体が世界最強格で、一つのグループでさえ表世界の戦力では相打ちがないところ言われているほどの強者たち。メイズにも負けない程度には対抗できるため、嫌なことはNOと言える者たち。あと裏世界全員に言えることだが、こいつらは特に神や王と言った上位存在を嫌正在している。

大自然の中を彷徨い移動するエネルギーの球体、量子玉。広大な砂漠地帯を堂々と飛行する超巨大な炎鳥、獄炎鳥。大陸を分断する巨大山脈の頂きに鎮座する金色龍、古龍。己の文明の再建を目指す古き世界の生き残り、万能戦艦。幻想的な雰囲気と輝きを漂わせる巨大な大樹、幻想大樹。最果ての大陸南北の隙間に居座る槍を持った亡靈、魂喰。湿地帯をゆつくりと這いざる巨大なスライム、源生粘体。緑生い茂る豊かな大地の空に浮かぶ白い球体、妖魔聖蟲。荒野が山岳が大地が蠢き破壊されていく光景、大地真核。何の変哲もない様に見えるただの巨大な大樹、暗黒大樹。

転生できるらしい

何もない空間に、誰とも知れないヤツがいた。

「ここ何処よ？いやマジで……」

そいつは記憶を探りながら考え込む。

「えへと、確か……」

『死んだんですよ。バイクで山道を走行中に事故で、です』

急に声が聞こえ、そいつが驚く。

『馬鹿みたいにとぼしているから、操作を誤つて崖下に落つこちたん

です。思い出しました？』

『思い出した。でも仕方がないだろ、残業続きで疲労困憊、テンション
がおかしくなつてたんだ。で、お前誰？と言うか何処？』

そう言い再度見回すが、誰もいない。それどころか、周囲の認識す
らできない。

『この場に名前なんてないんですよ。私はこの世界に流れ着いてきた
魂を転生させるシステムみたいなものです。つてことで転生できま
すが、しますか？』

「は？ マジ？」

システムに転生するか聞かれ、拍子抜けになつていた。

「て、転生？ できんの？」

『できますよ。で、どうします？ ステータスとかもありますが？』

それを聞いた転生者は……

「や、ヤツター！ 異世界転生キタコレ!! チート使つて無双できるん
じやね!!」

『死んだというのに随分と……。まあそれは貴方の容量次第ですね。
今確認するのでしばしあ持ちを……』

その確認の間、転生者は今までの人生を勝手に語りだしていた。
「いやー、前世はいいことなんてなかつたからな。不運だつたと言つ
ても過言じやない。イジメなんてのはなかつたが、友達なんていな
し、親兄弟含めて人間関係もいいとは言いがたかつた。就職してから

もブラック企業に入つちまつて苦労と理不尽の連続、そんなオレが転生とは……」

『確認終わりました。貴方の残り容量は……』

感慨に浸る転生者を無視して、システムは話を続ける。

『300です。まあ転生者にしては随分と低いですね』

「は？」

呆気にとられ、口をパクパクさせることしかできていかない転生者に、システムは説明を開始しようとしました。

「では転生の……」

「いやいやちよつと！説明してくれ！」

転生をさせられる前に声を上げる転生者。

『だから転生の説明……』

「そうじやなくて、なんで低いんだつてところだ！」

勢いよく気になつていたとこを質問する。

『そうですね。ではこの際ですので、すべて説明しましょう。あとでグチグチ言われてもうるさいだけなので』

「頼む！」

詳しく述べる気になつてくれたようで、転生者はそれに喜ぶ。『貴方の容量は低いです。普通転生者なら、低くとも1000は越えます。この水準は、不便のない人生を送れる程度ですね。それに比べて貴方は300。記憶や自我を保つてられる最低値で、創作物のようないい能力や特別な力などとは無縁の数値です』

どうやら、意識はそのままだが、転生者の思つていた無双やチートとは無縁のようだ。

「あの、その……数値を上げる方法とは……？」

『記憶や自我の廃棄ですね。魂の強度は転生するのに十分なので、謎に容量を食つているその部分をどうにかするしかありません。因みに廃棄すれば軽く10倍いや100倍ぐらいになりますよ、多分。まあ貴方には無理でしようけど』

どうやら、記憶などが原因で容量が削られているようであつた。

「波乱万丈だつたとは言え、そんなに圧迫してたのか。まだ26だつたのに……あと記憶の廃棄は無理だな、普通に。最適化とかできない？」

『表層はできますが、中層以降は情報量が多く複雑すぎてあまり手出しきません。どうしてもと言うなら、廃人覚悟でやつてもいいですか？』

『いややめてくれ、精神崩壊とか洒落にならん。できる範囲で頼む』
『そうして最適化が始まる。すると、転生者は一瞬気分が良くなり。分かりました……終わりました。500ほどになりました』

「早つて、てかひつく！それでも半分かよ！」

一瞬で終わつた作業と、それでも大した事のない結果に驚きを隠せない。

『仕方がないでしょう。所詮は小手先だけの応急処置です。てかこれでも捨てまくりましたからね、文句言わないでください。適当なスクリ付与して問答無用で転生させますよ』

文句を聞いたシステムは、少し苛ついたのか脅しをかけ転生者を黙らせる。

『ゴメン！悪かつた。許してくれ』

『別にいいですが、一つ。暴力を受けなかつたからイジメじゃないとか考えない方がいいですよ。深くは見ていませんが、アレは完全にアウトです。貴方が異質でポジティブだつたから酷く見えなかつただけですから』

酷いものを見たという感じに、システムはそう言つた。

『そうかな？別に実害は出でないからいいんじやね？』

『それは貴方が気にしてなかつただけでしょう。それに年並外れた能力の高さと異常な思考回路。すべてが奇跡的な配分で、事態が悪化する前に解決してます。それが貴方の能力では？』

どうやら、持ち前の能力の高さで、序章ですべて終わらせていただけの話しであつた。それにしては嫌われ過ぎだろうとシステムは思つていたが、見ていく途中で異常者だからと納得していた。

『では転生の説明と準備を始めます』

「よしきた！どんとこい！」

そして、異常者の転生が始まつたのだつた。

ステータス設定……のはずが

『ではまずステータスを決めましょう』

「おお！なんか出てきた！」

システムの声に合わせて、転生者の目の前に半透明の画面が現れる。

「転生の際に決められることは、種族、性別、スキルの三つです。あればですが、固有能力に関しては転生後に表示されます」

「うおお！種族とスキルの数スゲエー、けど容量足りねえ！」

勝手に画面を操り、内容を見ていく転生者。そこにはファンタジー御用達の種族やスキルと言ったモノが大量に表示される。それに興奮する転生者だったが、高位の種族やスキルほど容量を要求され、殆どが選択不可になっている。

『種族の大まかな種類は、人間族、魔人族、亜人族、その他です。念じればより詳しい内容がでますが、貴方は種族も性別も固定のようですね』

「なんでだよー！吸血鬼とか魔人とか獣人とかになつてみたかったのに！てかなんで性別までつ!?」

それどころか種族に性別まで既に決まつており、その内容も解析不能で表示がバグっていた。

『手出しできなかつた領域のせいでしょうね。恐らくそこに大半の容量が食われているのでしよう。ですが安心してください。スキルの方は選べますので』

「選べるつて言つたつて低レベルなもんばつかじやん！チートのチの字も見えない！」

初期設定でありそうな、ノーマルスキルはそこそこ選べるけど、中位のスキルは数える程度で、上位スキルは一つか二つが限界と言つたところだ。

『選べるだけマシです。本来なら才能と努力、運などが関わつて取得やレベルアップするものなので……かもうそろそろ黙つてください

い。うるさいです』

「あ、ごめん……」

声色を変えたシステムに謝る転生者は、すぐに静かになり詳しい話を聞く。

『才能を無視して取得できるのはここだけですが、転生してからもスキルは普通に取得できます。ですのであまり悲観する必要はありません』

『そういうスキルってなんなんだ?』

転生者は気になつたことを率直に聞いた。

『本人の行動や才能によって、各個人に合わせて技術を与える補助システムです。段階は1～10まであり、数値が上がるほど性能も上がります。因みに、基礎能力のレベルが上がれば上がるほど一部のスキル取得や成長が早くなります』

『技術の範疇しか与えられないんだな。その分学習できそうだ』

本人が出来ることの補助や強化、更には知識や技術。凄いことではあるが、あくまで万人が出来る範囲のことを補強しているだけのようだ。

そこで何かを見つけて、追加で質問を飛ばす。

『例えばこの強奪っていうスキルで他人のスキルを奪つたらどうなる?』

『その場合、システム上のスキルを奪つたことになります。ですので、使用者はその分技術が向上し、対象は経験や技術だけが残ります。まあステータスのことを知っているのはごく一部なので、傍から見れば片方は動きが良くなつて、もう片方は多少動きが悪くなる程度でしようか』

あくまでシステム上のスキルが奪われるだけであり、全てがなくなるわけではないようだ。よつて強奪者は、数値ほどスキルを扱えない振り回された状態になり、奪われた側は補助がなくなり技術の精度が下がるらしい。

「まあ技術の範疇つてなんなら当然か」

『はい。スキルレベルも当人の技量に合わせて上昇します。自分が出来る範囲+1ぐらいですね。当人の技量が上がっていることが一番効率がいいですから』

裏を返せば、レベル7の使い手は、スキルを抜かれてもレベル6相当の技術が扱えるのだ。

「スキルを取りすぎるとどうなる?」

『他のスキルが取りにくくなったり、全般的な成長が遅くなります。統合して上位スキルにすれば多少はマシになりますが、基礎レベルが低い状態でやれば、変なスキル構成になつたり最悪詰みます』

そして奪つた側は、その分容量を取られてしまう。おまけに実力に見合わないレベルのスキルを持つてしまふと、更に成長は鈍化する。幸い強奪スキル自体にも調整機能はついてるので多少は大丈夫だが、高レベルや特殊スキルなどを適当に奪いまくつてしまふとそなうのだ。

「ハズレススキルだな」

『そうではありませんよ。使い方を間違つてているだけです。転生者にありがちですがね』

ステータスを知れる数少ない存在である転生者にありがちなミス。スキルの大量取得や高レベル化などをして、後の成長に大きく悪影響が出やすいようだ。

「やっぱ地道が一番だな」

『そうですね。急激なレベル上昇は、ショック死を引き起こす場合もありますので』

唐突の告白に一瞬目を丸くする転生者。

「え? なにそれ怖い」

『基礎レベルは最大が100で、存在の成長に合わせて数値が上昇します。その中で最も効率がいいのは、他の高レベル存在を殺して、その存在の残滓を取り込むことです。その時に取り込みすぎると過剰摂取で死に至ります』

そう言つて実際の様子を脳内に流される転生者。どうやら強力な

存在は複数人か、特殊なスキル持ちじゃないとダメらしい。でなければ最悪即死してしまうようだ。

「そういうやなんレベルに上限があるんだ？」

『それがシステムの限界だからです。強くなりすぎるとこちらでも管理しづらいので』

『能力が上がりやすいようにしているようだが、上限を設けることによつてインフレを未然に防いでいた。なぜなら、強くなりすぎて世界を壊されでもしたら困るからである。

「てかなんで強くする必要があるんだ？」

『質問が多いですね。まあ聞かれたら答えますが……それはですね、強力な存在は膨大なエネルギーを発生させます。それをシステムを通じて回収することによつて世界に還元させてるんです。それに人類や魔物などを利用しているだけですよ。……面倒なので適当に情報突っ込みますね』

『そう言つてシステムは、世界の状況や自身のことについて軽い情報を転生者に見せつける。

「お、おおっ！なるほど、そういうことか。じゃなきゃ滅ぶんだな、だから調整していると』

『はい、そうです。人類や生物にとつて過剰なエネルギーは悪影響でしかありませんし、こちらも漏れ出すエネルギーの回収と不足分の補填をしなければいけません。なにとぞご理解を』

『事情を話したシステムは、スキル選択画面に戻す。

『ということで、スキルの選択をしてください』

「あ、はい、わかりました」

そのままシステムに言われるがまま、転生者はスキルを決めることにするのであつた。

スキル設定

スキルを決めるために目の前に表示されたスキル一覧を見ていく
転生者。

「剣術に、身体強化、解析……ノーマルスキルはこんなもんか」

『スキルは、通常スキルと特殊スキルがあります。通常スキルは、やろうと思えば誰でも取得できるスキルで、特殊スキルは適正者や特殊な才能をもつ者にしか取得できません』

システムがスキルについて簡単な説明を入れる。

「なんとか魔法とかはないのか？」

『魔法のプログラムを組むより、思考強化などをした方が安上がりで多様性が生まれるんですよ。固定されるとやり難いでしょう？それに体系化されたものは魔術として出回ってますし』

「…魔術を作つて提供するより、人類側の裁量に任せたほうがいい」とシステムは言う。その代わりに基礎能力を強化するスキルは豊富に取り揃えてあつた。

「プログラムの中での自由性とかはどうなんだ？」

『ありますが、システムに干渉されない程度に抑えています。不正アクセスなどを防ぐためです。技などを取りやめたのがそれが理由です。以前能力を使ってシステム内部に入り込んで、不正利用されかけたので』

ステータスを極力秘匿するのも、わかりやすいプログラムを作らないのも、すべてはシステムを認識させないためであり、過去の失敗を改善した結果だつた。

「わかった。じゃ、スキル決めますか。とりま特殊スキルでも……」

「つぐらいはいいものがあるだろうと思い特殊スキル一覧を見た
転生者は……」

「どれも1000超えじゃねえかっ！」

『特殊スキルですからね。才能という適性も、取りやすくなるための経験も無いのであればこうなります』

強奪、模倣、吸收、創造、補正補助、真偽看破、無効化、自動化、最適化、支配化、魔王化、全適合、万能作成、付与、迷宮主、破壊、不屈、思念、霸氣、特化、全属性、自己改造、不老不死、硬化、超成長、超耐性、超思考、超学習、超回復、等価交換、空間把握、異常攻撃、瞬間移動、情報偽造、技能選択、覚醒、透明化、透過、魔眼、叡智、憤怒、暴食、怠惰、強欲、色欲、嫉妬、傲慢、寛容、慈愛、分別、忠義、節制、純潔、勤勉……

どれもこれも高コストなものばかりで、転生者には手が届かない。「なんか安くならない?」

『できますが、あまりおすすめしませんよ。安全装置や調整機能などを取り外すことになりますから』

特殊スキルは能力などを真似て作ったモノだ。それをそそここの才能や適正がある、容量があるという理由だけで使えるようにできるシステムなので、安全対策は必須である。でなければどんな反動や副作用が起きるかわかつたものではない。それを外して使うということとは、最悪死ぬ場合も考えられる。

「いやそこまではいい。使った瞬間お陀仏とか考えたくない」「でしょうね。こちらも面倒な作業が増えなくて良かつたです』

そう言い転生者は通常スキルの方を見る。

大まかな種類は、技術系と強化系、情報系の3つである。技術系は、それに応じた行動に補正がかかり、強化系は基礎能力にプラスして自身を強化するもので、情報系は知識を得たり解析などができる様になる。

「通常スキルって転生してからも普通に手に入れられるんだよな?」「はいそうです。努力、経験によつて手に入れることができます。ですが何事にも向き不向きがあり、手に入れられるタイミングも成長速度も違いますが、育てていけばいずれ強力なスキルになるものばかりです』

理論上誰でも取得可能だと言うだけで、その度合いはわからない。すぐ手に入る者もいれば、死ぬほど努力してやつと得られる場合もあるのだ。さらに言えば取得方法も自分で探つていかなければいけない

いため、その労力は大きい。

「ステータスが見れるだけ有利なんだろうが、やっぱり楽したいな」
『おまかせというものもありますよ。こちらが対象者にあつた最適解を提案させていただくものです。その場合より対象者を最適化して容量が増します。ただし、少々特殊な形での転生という形になりますが』

それを聞いた転生者は、考えるまでもなく

「頼む！」

『わかりました。では良き転生ライフを』
即答して意識を失うのだった。

転生できた

今転生者は、とてもなく混乱していた。

何故かというと、それは思っていたのとは全く違う転生方法だったからだ。しかもそれで放り出された場所は、人っ子一人見えない大自然のど真ん中である。

(これはどういう事だ？転生つていったら、母親の腕の中で目覚めるんじやないのか？美人な母親に格好良い父親。それに周りには兄弟姉妹とかいたりして……。まあ、まだ慌てる時じやない。とにかくここから移動して安全な所に行かなれば！)

そう思い転生者は、体を起こそうとしたが

(ん？体がうまく動かないぞ。そういうえばステータスを見ていなかつたな。この身体についてわかるかも知れないな)

そう思いステータスを見てみると

ステータス	
・名前	無し
・性別	女
・種族	不明
・LV	1
・能力	不明
・スキル	成長補助LV1
言語理解	

(ん？は？なんだこのステータスは？)

自身のステータスを見て呆然とする転生者。

(は？0歳？0歳ですか？なんとなく分かつてたけど流石にこれはな

いでしょ。嘘だと言つてくれよ。大自然に0歳児が1人はないだろ！しかも種族が不明つて……、結局なにも分かつてないとか。てかどうしようこの状況

自身が何を思つて いるのか考えがまとまらずに、簡単に混乱して いた。

(とりあえずスキルでどうにかなるかもしない。詳しく見てみよう)

打開策を求めてスキルの詳細を見る事にしたようだ。

・成長補助……あらゆる成長を補助してくれる優れもの。これさえあれば大抵の事は人並み程度にはできるようになる。あとは努力次第。

・言語理解……転生者に与えられるスキル。ありとあらゆる言語を理解し、読み書きができるようになる。おまけとして若干の思考強化が含まれる。

(いい……のか？)

いいのか悪いのかわからなくて困惑する転生者。それもそうだろう、言語理解は転生者なら誰でも持つて いるスキルで、成長補助はあらゆる低レベルスキルの詰め合わせである。適性が読み取れず、苦肉の策としてどうにか頑張つて入れてくれたのが伺える代物だ。

(まあ詰め合わせ系は上位スキルつて話だから良い物なんだろうが) 適当にスキルを取りまくつた者への応急措置スキルに満足する転生者。

そう考えて いると

(あつちの方に人影みたいなのが見える。もしかして人でもいるのか？……いや待て、ここは異世界なんだぞ！ゴブリンとかコボルトかも知れない！ここは慎重に解析だ)

そう思い、その人影に解析をしてみると転生者。

（ステータス）

・小鬼ゴブリン

・L v ???

・スキル ???

（あれ？ 解析がうまくいかなかつたかな？ もしかしてレベル不足？ だつたら成功するまで連打だ！）

そう思つたので周りに向けて解析を使い始めた。それも手当たり次第に頭痛がするほどに

・草・草・草・草・草・草・魔草・・・

そこらじゅう解析を使いまくつたら、草から魔草になつていた。レベルは相変わらず変わつていないが、あくまで基準でしかないので無視をして使い続ける。

（頭痛がひどくなる一方だ。だが我慢できないわけでもないな。この調子で……）

そのまま使い続けること数分、名前に続き簡素な説明文も出始めたのでもういいだろうと、もう一度近くにいたゴブリンに解析を使うと

（ステータス

・小鬼ゴブリン

・L v 3 1

・スキル・身体強化 L v 3 ・棍棒術 L v 2 ・打撃耐性 L v 2

（えっ!? 何あのレベル！ ゴブリンつてこんなに強いやつだつたつけ？ つてまでまで、これが普通のレベルかもしれないじゃないか）

と、転生者が戸惑つていると、急に巨大な影が差した。

「次はなんだ!?」

その瞬間、巨大なドラゴン、龍？ がゴブリンのいた近くに舞い降り

た。上手く見えないとは言え、その壮大さに驚き呆然としてしまった
転生者だつたが、すぐさまハツと我に返る。

(そつ、そうちつ！ 解析しとかなきや！)

解析しようとしたその時、ゴブリンが高い身体能力で龍に攻撃しだす。しかし龍には傷一つ付かず、コバエを払うようにゴブリンを払いのけ、ゴブリンはボロボロになりピクリとも動かなくなつた。

そして邪魔者がいなくなつたのか龍はその場に蹲り、のんきに寝始める。

(ヤバイ、ヤバイ、ヤバイ！ あいつ強すぎだ！ レベル31のゴブリンを一瞬でつて……そ、そうちつ解析、解析だ！)

ステータス

- ・リントヴリム
- ・L v100
- ・スキル???

(え？ 龍というよりドラゴンだ！ それにレベルが100だと!? ダメだ危険すぎる！ 速く何処かに逃げないと！ けど、体が動かねえぞ！ どうすんだ!!!)

とにかく逃げようと体をジタバタさせていると

(が、体が少し動くようになつたぞ！ なにかスキルでも手に入れたのか？ そんなことは後回しだ！ とにかく速くこの場から逃げないとつ！)

転生者は必死になつて体を動かし移動する。そして逃げた先にあつた横穴に入り込んだとたん、すぐに意識を落としたのだった。

起きたら……

(あ、なんかレベル上がってる、なんでだろう？身に覚えがないし上位ス

暗い場所で赤ん坊が目を覚ます。

(「ここはどこだ？そういうや俺はなんでこんな所で寝ているんだ？今は大変な時期で早く仕事に行かなくちゃいけないのに！」)

転生者はそう思いながら立ち上がるようとするが、なぜか立ち上がりえない。

(あれ？なんで立てないんだ？)

と周りを見渡すと……

(あ、そうだつた。俺は異世界に転生したんだつたな。それから危険すぎる敵を見て逃げてきたんだつた)
はあくと溜め息をする。

(これからどうしろっていうんだよ。いくら強力なスキルがあつたつて、勝てるどころか逃げられるかどうかわからねえよ。そういうば、ステータスの方はどうなってるんだ？見てみるか……)

ステータス

・名前	無し	/	年齢	0歳
・性別	女			
・種族	不明			
・LV	2			
・能力	不明			
・スキル	成長補助LV2			
言語理解				

キルってレベル上がりぎりぎりなんじやなかつたつけ？低レベルだからか？）

最初は上がりやすいのは確かだつた。しかしそれでも上位スキル。そんな簡単に上がるとは思えないでいるようだ。

（まさかこの中に成長補正とかも混じつてゐるのか？だつたら嬉しいんだが、内容が見えないからな、わからん）

スキルの内容は見れない。なぜならそんな能力も特殊スキルも持ち合わせていないからだ。システムはあくまでも簡単なものしか見せてくれないので。

（にしてもこのスキル、特殊スキル以外を取り込むのか？まさかそれでレベルを上げてるとか？）

転生者の考察は間違えてはいない。だがそれに頼ると一定の水準で頭打ちになるので、経験や技量を鍛えなければいけないので。ここではそれに困る事は無いだろうが……

（……で、食料どうしようか？）

辺りを見渡すが、視界が上手く機能せずに草しか見えないようだつた。

（どうしよう、そちらの草でも解析して食べれそうなやつないか見てみるか。最悪不味くとも我慢すりやいいだけだしな）

そんな事を考えながら、周りの草を見てみると：

毒薬草

（ん？なんだ【毒薬草】？いや、まあこんなもあるのか？）
と思い首をかしげる。

毒薬草・毒薬草・毒薬草・猛毒薬草……

（な、なんだと？ここ一帯、毒薬草しかないんだがどうなつてんの？）

そんな事を思つて周りを解析しまくつた転生者だつたが、結局何も見当たらなかつた。そのうちに周りは暗くなり、気が付いた時には疲れのなか寝てしまつっていたのだつた。

こうして転生者の異世界での一日は幕を閉じた。

異世界掲示板

転生者は困っていた。

（腹が……空いた……）

周囲には凶惡な魔物たちと食えそうにない野草、完全に殺しに掛かっているとしか思えない状況に思考が低下し始めていたのだ。

（なにか、なにかないか……）

新たなスキルを得ようとしたり、レベルを上げようとしたりと、やれることはすべてやっていた。だが打開策は見つからず、ただ消耗するだけである。

（ステータス……何の役にも立たない。助けてくれ、ヘルプ、ヘルプミー……つ!?）

そうやつて助けを求めたその時だつた。ステータス以外の表示が視界に移る。

（け、掲示板？いやこの際細かい事はどうでもいい！やるだけやつてみるしかねえ！）

そして掲示板に意識を集中させる。

- ・新規転生者サポートスレ
- ・新スキルのアイデア会
- ・【悲報】ワイの迷宮攻略されそう
- ・【朗報】高難易度迷宮クリアできそう
- ・暇だから適当に面白い事書き込んでいくスレ
- ・聖剣 捨てる 方法
- ・魔剣 手放す 方法
- ・美神つてやっぱクソだわ
- ・ヤバイ組織ランキング
- ・列強国家ランキング
- ・高難易度迷宮ランキング
- ・世界最強ランキングトップ100
- ・十七英雄序列三位に出会つたけど質問ある?

・世界三大危険地帯に行つたけど質問ある?

・【悲報】ワイ死徒十三席の末席に入つてた。

・四凶神に出会つた話をする

・奴隸制度つて実質派遣や契約制度みたいなもんだつた件
・紛れ込んだ隣国の姫、四天王になる part 65 9

・魔王のワイ、迷宮核を手に入れ無事社畜ヘジョブチエンジする

・迷宮主のワイ、高級施設立て維持費に殺されかける

・【悲報】魔法にあこがれたワイ、魔法が使えないことが判明する

・世界の美味しい物リスト

・スライムつてかわいいよね

・
・
・

こんな感じのタイトルがどこまでも続いていた。

(な、なんだこれ、最近のから数百年前のまであるぞ……とりあえず新規転生者サポートスレつてのを開いてみるか)

なにかわかるかもしけないと期待を抱き、転生者は取り合え₂巢見てみようと新規転生者サポートスレを開く。そして書き込まれている途中の最後尾を見た。

567 : 新規転生者

タイトル見て来たんですけど、だれかいませんか?

568 : 古参転生者

いるで、てか新人か。よくここ分かつたな。

569 : 中堅転生者

ネットがある世界から來たんやな。歓迎するで

570 : 古参転生者

で、どうしたん? なんでも答えてやるから質問どうぞ

571 : 新規転生者

えくと、今食料もない魔物だけの危険地帯にいるんだけどどうしたら？因みに周囲の様子とステータスはこんな感じ

572：古参転生者

うわー、結構詰んでんな。でも安心しな。転生者は最初の五年は生存保証されとるから

573：転生迷宮主

おつ？新人？見せてもらつたけど大変そうだねー。俺も昔はそんなだつたよ

574：古参転生者

自分語りは別スレにでもどうぞ。一応ここは相談スレなんやぞ

575：中堅転生者

そーやで、助けを求めるに来てんだからちゃんと答えなきやダメやで。

576：転生迷宮主

悪い悪い、そうだな。せつかくの新人だ。大切にせねば話し相手が減るつてもんよ

577：古参転生者

ここ入つてくるの少ないくせにすぐ死ぬからな。調子乗つたり転生場所悪いせいで

578：新規転生者

そうなんですか。じゃあ早速なにかアドバイスください

579：古参転生者

さつきも言つたが、転生者は最初の五年は自殺とかしないとめつなことが無いかぎり死なない。だからその間にレベルアップすればいい。それで大抵の事は解決する

580：中堅転生者

スキルを取りまくるのもいいで、特に強化系。レベル低いうちは取りやすいし、ワイらは死なないから無茶して取り放題や

581：転生迷宮主

めちゃ大変で苦しいがな。まあ死なないから大丈夫だよ

582：転生魔王

魔力とか使いまくつて超回復利用すればいいんじゃない？

583：浮浪転生者

耐性は必須だぜ。特に状態異常系は取つとかないとな

584：傭兵転生者

技術系のスキルも取つとけ、特に体術とかだな

585：鍊金転生者

知識系も忘れずにな。ぶちやけこつちの方が重要

586：王家転生者

権力者には気を付けとけよ

587：魔物転生者

雑食っていうスキルいいで、上位スキルになると悪食とか異食になつてなんでも食えるようになるから餓死せんですむ。ただし食事の楽しみを忘れかけるので注意

588：亜人転生者

流石は厳しい異世界を生き抜いた奴らだ。面構えが違う……

589：新規転生者

ありがとうございます。とりあえず死なずにすみそうなのでやってみます。

そうして転生者は、特に書き込むことなく情報を集められたので掲示板を閉じ

（死なねえのが、でも腹は減る……）
近くにある草を見て

（食うか）

つかみ取った毒草を口に放り込むのだつた。

(苦、
不味ツ?
!?)

あれから……

転生者はとある事を考えていた。

(名前どうしようか?)

死なない事がわかり、草を食べたり鍛えられるだけ無茶をしてスカルの練習をしたりと色々やつて一週間、ふとそんな事が頭に浮かんでいた。

(名前が無いと不便だ。それに掲示板にだつて、名持はいいつて書いてあつたし)

この世界では、名を持つ事が地味に重要なつてくる。なぜなら、名を持つと存在が安定し能力が上がりやすくなるのだ。これは、システムが対象をキチンと認識できるようになり、その恩恵を受けやすくなるなどの理由がある。

(で、どうするかな?前世の名前は覚えてないし……)

転生者は容量欲しさに最適化を行つたせいで、人格に影響が出ない記憶を破棄されてしまつていて。そのせいで名前も含めたほとんどの事を覚えていないのだ。

(大まかな記憶と感覚的にわかる事は多いけど、正確な事柄が思い出せない。まるで最低限だけまとめて残されて、それ以外を全部捨てられた感じだ。實に不思議だ……)

もつと言うと、大量にあつた名前付きファイルを“大切な物”といふ最低限しか入らない一つのファイルにまとめられて、残りを捨てられたようなものだ。だから中身は何となくわかつても、場所や人の名前などが欠如していた。

(まあ大切だと認識してた単語はあるから、それで適当につなぎ合わせるか。あと掲示板とかも見て参考になりそうなのも探せばいい。魔物の名前とかは当てにならんし……)

そう思い転生者は、いつものように掲示板を見ながら名前を考える。

(いつも思うが、なんだかネットスラングとか中二病っぽいのが多い。異世界だからか、そういう転生者が多いのか)

掲示板の利用者は、システムに干渉できる転生者や迷宮主と言つた世界について理解のある者たちで構成されている。

(質問コーナー?……なんかシステムとか管理者とかいるんだが……)

中には質問コーナーなどもあり、システムや管理者などがバランスや世界観を壊さない程度であればなんでも答えてくれるものまであるのだ。

(ま、まあ今のところは掲示板は見るだけであまり使わないと決めるからな。のめりこんだら大変だし、安価とかもつての外だ)

極力掲示板への書き込みはしない事にしている転生者。なぜなら、死なないにしても危ない事態なのには変わりなく、今は兎に角生活基盤を整えなければいけないからだ。そこに人付き合いが苦手なのも合わさり、なかなか手が出ないのだろう。

(そういうや今世じやオレは女か、実感が薄いが相応の名前の方がいいよな)

年齢が低いせいか性別に実感が湧かない転生者は、折角だと女性らしい名前を考える。

(異世界っぽい名前は……ありきたりな奴ばつかで参考になりそうなのがないな。やっぱ前世と同じ感覚で付けるか)

名づけスレとかいうものを見つけた転生者だったが、ふざけた名前やありきたりな物しか出てこず、カタカナ表記の名前を諦める。というよりもそもそも感性に合わなかつたようだ。

(じゃあ、えと、木枯……いや違う。平片……これも違う。古内……これだ！古内 明理にしよう！)

ゴロがよさげなものを思いつき、予定調和の様にそう決める古内。すると体に力がみなぎり……

『名前決めたんですね』
(し、システム!?)

システムが話しかけてきたのであつた。

システムとの会話

システムがいきなり話しかけてきて驚く古内だが、そんな事結構いなしにシステムは話を続ける。

『変な場所に転生させてしまつて見失つてたので死んだかと思つてしまつたよ』

（いや補正有るから大丈夫だろ……つてそうじやない！聞きたいことがいろいろあるんだ、答えてくれ！）

突つ込みながら冷静？に話を続けようと努力する古内だが、やはり心は安定しないようだ。

『いいですよ。不手際のお詫びです。どんな質問にも三つだけ答えましょう』

（なぜ三つ!?ってわかった！三つだな！わかったから消えないので！見捨てないで！）

システムの気配が薄くなるのを感じ、急いで引き留める古内。それに引き止められてか普通に戻つてくるシステムに安心してかため息を吐く。

『長い話は受け付けませんよ。こちらも用事があるので』

（ああ、道理で……すまない、ホントごめん。つい話すのが楽しくなつてな）

どうやらシステムも仕事があるようで、それは悪かつたと古内は反省する。だが次の瞬間には気を取り直し質問が始まつていた。

（じゃあ一つ目なんだが、ここはどこだ？掲示板にもそういう情報は無かつたが？）

『ここは世界の裏側、最果ての大陸です。地図はこんな感じで南北に大陸が一つづつある感じですね。表世界には知られていない場所なので、そういう情報は出ませんよ。特に位置や細かい情報は制限をかけてますので掲示板でもやり取り不可能です』

簡単な説明とともに世界全体の地図が出され、最果ての大陸の情報が出される。地図としては大まかな枠組みでしか認識できないよう

だが、南北のアメリカ大陸を歪ませたような形だ。

(じやあ二つ目なんだが、この大陸での生存方法を教えてくれ)

『五歳までにレベルを30以上にしてください。毒とか使えばそこらの魔物は簡単に倒せるので楽ですよ。あとスキルも5以上であればより生存率は高まります』

(いや、そうかもしれないけど……具体的には?)

『そこらに生えてる毒草を使うんですよ。それをスキルでも何でも使って毒装備を作つて、暗殺とか特攻するんです。生きたいと思つて行動し続ければ滅多に死なないので頑張つてください』

古内にとつてこの大陸のレベルは高すぎるるので、解決法を聞いていた。それに対しシステムは、転生者得点で限界まで無理できるから簡単だよね?と無茶な方法を提案してくる。

(……最後に、俺の能力について教えて)

『すみませんが無理です。こちらも把握していないので。ですがレベルを上げて行けばいずれ使えるようになりますよ』

能力に関しては、教えなくともある程度は使えるようになるのだ。なぜならそれが自分自身だからだ。それをより分かりやすくするためのステータスなど言うだけで、絶対必要かどうかと言われるとそうではない。もちろん古内の様に自覚がない者薄い者もいるだろうが、基礎能力が上がれば能力も自ずと自覚できるようになつてくるのだ。『そのかわりに魔導について教えましよう。能力と魔法系はあまり相性よくないですが、最低限の事はできるでしょう。……あとここでは学ぶのが難しいですからね』

そう言つてシステムは魔導についての情報を古内に送り込んだ。因みに、基本的に能力と魔法系は相性が悪い。理由は、能力は便利で強力だがその分容量を多く使ってしたり、特化しすぎていて他の力を受け付けなくなるからだ。

(これが……魔導? 魔法と魔術の合わせ技みたいなもんか?)

『そうです。才能がいる代わりに汎用性が高い魔法と、誰にでも使え

る代わりに決まった事しかできない魔術。その両方が使え、更に組合わせることが出来る技術です。本来なら才能と容量が豊富で、その上で努力を怠らないものにしか成せない技ですよ』

スキルで補強できるとは言え、元である存在の能力も高いことが求められるのが魔導と言うものだ。その知識と技術をいつでも回覧できるようにしてくれていた。

(なんとなくだが感覚も分かつたし、教材は多いに越したことがないからな。ありがとな)

『まあこちらも手を出し過ぎるとダメなのでこれが限界ですが、頑張つてください』

そういうとシステムは、古内との会話を切り辞めて消えるのだった。

成長と戦闘準備

毒草を食い、スキルを鍛え、無茶な修行を繰り返して数年。古内はステータスを見て満足していた。

ステータス

・名前	無し	/	年齢	3歳
・性別	女			
・種族	不明			
・LV	5			
・能力	不明			
・スキル	成長補助LV4			

言語理解

「よし！スキルレベルが上がったぞ！」

掲示板を見る以外で唯一の楽しみとかしたレベル上げで、久々に上がったスキルレベルを見ながら嬉しそうに声を上げる古内。

「たつた一レベル上げるのに一年かかつたな。掲示板を見る限りだと異常に速い速度らしいが」

レベルが低いうちは上げやすいのは確かだが、複合スキルや特殊スキルは便利な分上げずらいのだ。最低限とは言え、すべてのスキル効果が得られる成長補助はとりわけ上げにくいはずであつたが、掲示板で集めた情報を使い毎日動けなくなるまで修行した結果である。

「基礎レベルも年齢以上だし、人間界じゃ強いほうなんだろうな」

基礎レベルは年齢とともに上がり、二十代で止まってしまう。それ以上は修行するなり、魔物を倒すなりしなければレベルが上がらないのだ。

「この世界の五歳児相当の身体能力と、一人前を超えたあたりの技量か」

肉体がまだできていないので補助に頼りきりになるが、それを踏まえても前世の成人男性程度であれば倒せるほどの実力を身に着けた古内。

だが……

・小鬼ゴブリン

・L v 6 3

・スキル・斥候L v 6・心体強化L v 6・対物理L v 5・対異常L

v 4

「うわっ、また来やがった。ああいうやつとは戦いたくないな」

そう咳きながら気配を殺してそそくさと逃げる。

「俺は自然発生した魔物と戦いたいだけなによ……」

この世界には魔力から自然発生した魔物と、生物的に生まれる魔物が存在する。古内が探しているのは前者で、今見つけたのが後者であつた。なぜ前者がいいのかというと、レベルのわりに経験や技量などが低く戦いややすいからだ。

「にしてもどこから来てるんだ？あいつ？」

斥候のスキルも相まって、未だに相手の素性一つわからない古内。スキルのおかげで辛うじてそこにいる事はわかつても、大まかな情報しか得られずに装備すらまともに認識できていなかつた。

「場所がわかるだけありがたいか」

レベルが高く熟練者のような雰囲気を漂わせ、最上位スキルを当たり前のように保有する小鬼など誰も相手したくないだろう。古内も補正が無ければ、今頃吊るしあげられて捕まっていたかもしれない。「道具でも作るか。あと手ごろな魔物探しも」

そんなことを考えながら小鬼をやり過ごした古内は、集めた枝や毒草を使って魔導により道具を作り、時より広範囲の探知を使いながら目的の魔物を探すのであつた。

スライム討伐！

道具を作ることに成功し、草の中をこそそとしながら標的を探す古内。

（やっぱ異世界での最初の敵と言つたらスライムとかだよな）

スライム。それはRPGなどで最弱として名高い粘性生命体である。古内はそれを探していた。

（掲示板によるとスライムはどこにでも湧き出て、食物連鎖でも底辺に近いって書いてあつたしちょうどいいだろうな）

掲示板にて情報収集を行つた結果、スライムという便利生物は、倒してもよし食料にしてもよしと、非の打ちどころのない魔物だつた。ただしノーマルに限る。

（注意点もあつたが、先手を打てれば問題ないらしいし、高レベルにしてはどれも強者だから近づかぬきやいいだけだ）

だがスライムは弱い魔物であるが、侮つていい相手ではない。あくまで対策や性質が知れ渡つているから倒すのが容易というだけで、無知で挑めば十分に危険な魔物なのだ。

（お！いたいた！どれどれ、ステータスは……？）

・粘性生物

・L v 1 1

・スキル・雑食 L v 3 ・打撃耐性 L v 2 ・毒物耐性 L v 1

（20レベルも超えてないし強いスキルも持つてない。けど……ええい！きつと大丈夫だ！）

そう思い迷いを振り切つた古内はスライムの近くへ行き、持つていた長い短刀のようなもので突き刺す。

（おつー…）

するとスライムは簡単に崩壊し、べちゃりとドロドロの水たまりを作つた。そして……

「おおっ!!」

体に力がみなぎり、レベルが一気に引き上がる。

「ホントだ！スゲー割のいい魔物だな、スライムつて！」

人間界の地上にいるスライムは、基本スキルもなく5レベ未満しかなく、古内が倒したのはその2倍以上のレベルを誇るものだ。しかし掲示板によると、20レベまでは大して強さが変わらず、その割にレベルアップには打つてつけの魔物として紹介されていた。

「レベル低いから塩かければ倒せるし、魔物の弱点の魔核潰せば即死するしでホント都合がいい魔物だ」

塩を用意できなかつた古内は、土魔道で細長い短刀を作り出し、スライムの魔核を貫いたのだ。不意打ちなのと、そもそもあまり強くないことも相まって簡単に倒せていた。

「一気に8レベまで上がつたぞ。この調子でじやんじやんやつていこう」

スライム退治に味を占めた古内は、そのまま次のスライムを探し出し次々に葬つていく。

「5体倒しただけで、高レベルスライムのレベルを超えた……」

そして短時間で15レベまで上げた古内は、ニヤニヤが止まらなくなっていた。

「この調子でいけば20……いや、30レベもすぐだろ」

格下となつたスライムではレベルは上げにくくなつたものの、それは数をこなせばどうとでもなるだろうと高をくくり、スライムを探し出すのだった。

だが古内はまだ知らない。20レベ以降のレベルの上げにくさと、魔物の強さを……

夢？

白衣を着た顔の見えない誰かが、満点の星空を見てニヤリと笑っていた。

(誰だ、こいつ……?)

それはまるで、心の底から欲しかつたものが手に入つた喜びが滲み出たかのようなものだ。それを古内が認識した瞬間、そいつの周りに立体映像が投影され様々な情報が高速で流れていく。

(なに、してんだ?)

相変わらず顔はモヤがかかつたように見えないが、ニヤニヤが止まらないのかそういう雰囲気だけは伝わってきていた。そうしていると、視界の端から少年が現れそいつに話しかける。

(聞こえない……なに、話してんだ?)

見た目ではわかりずらいが少年も喜んでいるようで、それと同時に世界に何かが覆いつくされゆっくりと動き出す。

(デケエ……)

そいつらが立つていた……というより乗つっていたのは、巨大な動く惑星のようなものだつた。それは金属の装甲で覆われており、明らかな人工物、宇宙船のようなものだ。

(どこに、向かつてんだ?)

誰にも見えないように、誰にも分らないように仕掛けを施された宇宙船は、流れる周囲の景色は見えなくなり光速を超えどこかを目指して航行していく。

(中心? それに……)

チラリと見えた映像には、世界の中心が映し出されており、別の画面では何かを考えているのか、様々な資料が出されている。それについて少年と話し合っているが、納得のいく答えが見つからないのか、困った雰囲気が漂つていた。

(わかんね)

簡単なことは出てくるものの、難しいことは考えられなくなつていいようで思考を放棄しだす古内。そもそもそのはずで、夢のような空間

で色も音も認識できなければこうなるだろう。

(ん? ど、いくんだ?)

そうやつてボーと眺めていると、二人は宇宙船の中へと帰つていく。古内はそれを追いかけることもせず、いやできずに意識が薄れだした。

(なにも、できなかつたな)

ぼんやりとそう考える古内。それが何に対してなのかは本人にもわからず、しかし考へることすらしない。ひたすら誰もいなくなつた景色を眺めるだけである。

(……? どうして、ここにいるんだろう?)

そしてふとなにかが脳裏をよぎり、次の瞬間にはきれいに消え失せる。それは何も感じないはずなのに、明確な記憶として残つていすらしないのに、善悪問わずあらゆる感情がごちゃ混ぜになつたものを感じ、一瞬だけ鳥肌を立たせていた。

そして――

(ま、いつか……なるようになるや)

最後にはそう行き着き、古内の意識は完全に闇に沈むのだった。

全く上がらん……

レベリングを初めて一か月が過ぎていた。

「全く上がらん……」

20レベまではすいすいと上がっていたものの、それ以降は驚くほど上がりづらく、古内は苦戦していた。

「格下だからか?」

現在の古内のレベルは21だ。それに対し倒しているのは相変わらず20レベ以下のスライムたちであつた。20レベになつてからすでに100を超えるほどのスライムを倒しているが、大した成果は見られない。

「ちょっと掲示板で情報収集するか」

そうして古内は掲示板を開いて、スレを見ていく。

「えーと、レベルについては……ん?すぐ出てきたな」

大量にある変なタイトルの中から、目的のものを探そうとする古内だつたが、思い浮かべただけで目的の情報が出てきていた。

「便利なもんだ。これだけあれば書き込む必要ないな」

あまり人付き合いが得意でない古内にとつて、転生者コミュニティどころか普通のコミュニティに入ることすら難易度が高い。なので極力関わらないように生きているのだ。こうやつて前世でも他人に興味を示さず、何でも自分一人でできてしまうため大抵のことは問題にならなかつた。

「レベルの上げ方ね。思つた通りだ」

古内が見たスレには、効率のよいレベルの上げ方が書かれてあり、同時にやつてはいけないことも簡単に書かれていた。

「格上と戦うこと、二十歳前後なこと、一人で戦うことか」

格下ではそもそもエネルギー量が足りずに吸収効率が悪く、肉体の全盛期である二十歳前後でなければ還元効率が悪く、複数人ではエネルギーが分散してしまう。

「エネルギーが多い場所でもレベル上げしやすいのか。まさにここだ

な

要はどれだけエネルギーを吸収して自身へ還元するかの話なので、エネルギーが満ち足りている最果ての大陸はレベリングに打つて付けの場所だった。

しかし……

「とは言えな。勝てんだろ……」

エネルギーの多い場所の魔物は強くなりやすい。なぜなら魔物は、人類や他の生物よりも吸収率還元率共に高水準だからだ。特にここ最果ての大陸では、表世界の地上ではお目にかかるない強力な魔物がうじやうじやしている。おまけに言うなら、各地で縄張りを作つている最上位種たちは、高難易度迷宮の深層で出会うような奴を遙かに凌駕する実力者ぞろいだ。

「でもな。年齢の方はあきらめざる終えないし、タフネス特攻で戦わなあかんのか。やりたくねえー」

何度も言うが、転生者はよほどのことがない限り5歳までは死ない。だが死なないというだけで、ストレスも感じるし苦しくもあるのだ。そこで心が折れてしまえば即死亡だろう。

「お、ちょうどいいところに小鬼がいるな」

そう思い、小鬼のステータスを見る古内。

- ステータス
- ・ 小鬼ゴブリン
- ・ Lv 25
- ・ スキル・身体強化 Lv 1 ・ 打撃耐性 Lv 1

「……あいつ倒そうかな」

運のいいことに、今まで一番レベルの低い小鬼を見つけた古内は、そいつを倒そうと動き出したのだつた。

ゴブリン討伐

小鬼を倒すことにした古内は、手作りの毒短刀を手に小鬼に近づく。

(静かに近づいて、後ろから突き刺してやれば一撃だろ)

そうでなくても毒で死ぬまで耐えればいい。そう楽観的に考え、短刀の突き立てられる距離まで接近した古内は、スキルに身を任せて最速の突きを放つ。

「やつツ!!」

だが振り切る前に気付かれ、距離もギリギリだつたことも合わさり掠るだけに終わつた。さらに反撃も諸にくらい殴り飛ばされる。

「ツ!」

そのまま近づいてきた小鬼に追撃を受けそうになつたが、咄嗟に短刀を振るい牽制をして間合いを取つた。

(なんで気付くんだよ！なんであんなに強いんだよ！)

レベル差が小さく、スキルに関しては優つてさえいる。だがそれでもやつと、同じ土俵に立てたといった感じにしか見えない状況だ。

(来つ！)

一気に距離を詰めようと小鬼の踏み込みに気付いた古内は、急いで短刀を盾にして切り返す。

(仕留めきれなかつた……)

またも掠めるだけでワンステップでかわされ、体勢を低くして反撃を仕掛けてくる。

(ふう、冷静になれ。スキルと補正が反応している限り俺は負けない。にしてもなんでこいつこんなに動けるんだ？この大陸のせいいか？)

冷静を取り戻した古内は、ムダに自ら動くのをやめて、スキルの感覚に任せることにした。すると戦闘が楽になり考える余裕ができる。

(毒で弱つてきてるから攻撃が当てやすくなつたな)

少し経ち小鬼の動きは初めに比べ明らかに悪くなつていたが、それ

でも仕留めきれない。古内が無意識に安全や守ることを重視して奥手になつていることもあるが、小鬼が気を奮い立たせて頑張っているのが大きかった。

「これで終わりだ」

だが毒が回りきった小鬼は、足がもつれて体勢を崩す。そこへ古内は止めと言わんばかりに短刀を突き出す。

「おまつ!?」

短刀は胸に突き刺さつたが、小鬼はそこで死なず、力いっぱい古内の首を絞めてきた。

「さつさと……くたばれっッ!!」

苦しむ程度には閉まる首だが、小鬼もあまり力が残っておらず、古内が短刀を捻り強引に振り切ることで力が弱まる。そこへ追撃にと傷口に思いつきり蹴りをかましていた。

「はあはあ……なんとか勝つた……」

息を切らしながら、へたり込む。どうやらスキルによる補正された動きに慣れていないせいで、体の節々が悲鳴を上げたようだ。

「改善点が、多い……な」

スキルがあればどうにかなるなど甘すぎると後悔する古内。

（それに、殺したのに何も感じない）

転生した影響か、スキルの影響かわからないが、古内は殺しや戦闘に不快感を感じていなかつた。逆に成し遂げた爽快感の方が大きく、これからも頑張つていこうとさえ思つている。

「まあ、いいか。これぐらいじやないと生きてけないし」

そう思い、古内は仰向けになつて青空を眺めるのだつた。

魔導を使おう

ゴブリン退治から半年ほどが経つたある日、古内はとあることを思いついていた。

「魔導使えばもつと楽できんじゃね？」

毎日チマチマ勝てそうな魔物を探しては、死に物狂いで挑んでギリギリの勝利を收める。そしてその割にはレベルの上りは悪く、現在のレベルは23レベだった。そこで楽にレベル上げをするにはどうすればいいのかと考えた結果、手に入つて以降戦闘では一切使つていなかつた魔導の存在を思い出したのだ。

「風の刃で、こう首をスパッと斬り落とせれば楽なのにな」

そう思い魔導を使つて風を起こし、草むらに向かつて放つ。

「しょぼ……」

頑張つて刃のような形にしても草一つ傷つけることはできず、すぐに拡散してただの風になつてしまふ。

「いや、練習が足りないだけだ。目指せ風使い！」

自身の知識や掲示板、スキルの力を使いとにかく練習していく。「え」とまずは制御をちゃんとできるようにして、そつから極限まで圧縮できるようにならないと……

大抵の現象は、圧力のかけ方で決まる。大きな圧力を、小さな範囲に集中させれば貫通でも切斷でもできるようになるのだ。逆に分散できるようにすれば、大抵の攻撃は防げる。攻撃面で問題なのは、その必要圧力と制御のレベルの高さだつた。

「ダメだ。桁が違すぎる……」

全力で集中して放たれた風刃は、草を斬り裂くことができた。だがこれでは割に合わない。と言うか、そもそも動物、それも強化されている魔物には傷すらつけられないし、撃とうと頑張つている間にボコられて殺されるのが落ちだ。

「初心者には厳しかつたか」

ガツカリする古内は、他の属性について考えだす。

「やっぱ一番殺傷能力を出しやすいのは炎か？」

適当に火力を出して焼き殺してやればいい炎は楽だ。燃え移りさえすれば、耐性でも持つていらない限り大きな効果を狙える。

「土は動かしにくいんだよな。まあ防御が妥当だろう」

質量物を動かすには大きなエネルギーが必要だ。その分質量での攻撃になるので、比較的に簡単に攻撃を加えやすい。だが他の属性に比べて機動性や俊敏性に欠けているため、攻撃自体には向いていない。初心者は大雑把に防御に回した方がいいだろう。

「水……水つて凄いな」

動かしやすく圧力も加えやすい。水辺で使えないと水の生成にコストがかかるが、それを無視すれば使いやすい手ではある。

「てか、この世界の魔法つて属性で分けられてないよな？」

そう思いだし、再度スキルと掲示板で調べなおした結果。

・魔法……コストと想像力があれば何でもできる。

・魔術……特定の手順や術式を使えば、一定の効果のある現象を発生させれる。

・魔導……上記の二つを合わせたもの。

「だよな。想像力だ。術式は情報系のスキルから引っ張つてこればいいし」

わかりやすく属性があるだけで、実際のところはその枠を超えたことも普通にできる。

「重力に時空、空間とかも使えるのか」

その他即死や強制、絶対化などマジで何でもできる……が、基本的にそれだけのコストを用意できいため、属性という形にせざる終えない面もある。というか、それができるなら別の方法を使った方が安上がりで効果的だ。

「……あついた。あのスライムに重力つと

試しにスライムに対して重力を発生させる。するとスライムの動きが一瞬止まり、少し鈍くなつた。

「もつとだ。もつと周りの重力を巻き込む感じに……」

自身の発生させる重力に限界があるのか、周囲の重力を利用しようと操作する。するとスライムは更に潰れ、動かなくなつた。しかし倒せたわけではなく動きを封じただけで……

「う、動けん……」

同時に古内も魔力の使い過ぎでその場から動けなくなつっていた。それが十数秒続き、古内が魔法を止めてスライムも何事もなかつたかのようにまた草を食いだす。

「……修業が必要だな」

そう結論を出して、毎日の日課に魔法の練習を入れるのだった。

一年の成果

力を高め、突き出した手から風の刃を飛ばす。それにより、向かつてきた複数の小鬼の首を斬り落としていた。

「疲労感も息切れもなし、速度威力共にも問題なしつと」

そしていつものように小鬼たちから？ぎ取るだけ剥ぎ取つて、その場を後にする。

「あれから一年、あと半年で五歳か」

魔導を修業し始めて、およそ一年。ひたすらに魔導を使い続け、やつと同レベル代の小鬼を一撃で屠ることができ的程度の威力に仕上げていた。

「スキルは5レベで、基礎は28レベか。早いんだろうが、ここじや物足りんな」

勝てそうなやつを片つ端から狩りまくつた結果。残り半年で、目標一步手前まで來ていた。

「おつ。27レベの豚人オーラクだ」

さつとステータスを見て、生まれて間もない豚人だとわかつた古内は、さつそく攻撃を仕掛ける。

「風刃！」

古内がそう叫ぶと、先ほどよりも数段鋭い風刃が背後から豚人を襲う。それに気づいた豚人は、咄嗟に腕を振り盾にしながら風刃を受けた、後退しながら体勢を整えた。

それに合わせて古内も短刀を構える。

「武器もなしにオレに勝てるとでも？」

フル装備で尚且つ古内の方がレベルもスキルも高い。体格差やステータス外の評価もあるが、それでも揃えるだけ揃えている古内の方が普通に有利だ。

「反応なしか。まあ……当然だろうがなッ！」

全力で接近し、慣れた手つきで短刀を振る。それを紙一重でかわされ、瞬時に薙ぎ払いの手刀が繰り出されたが、小柄な古内の方が素早く

く 即座に距離を取っていた。

「本能とスキルによる技術。再現された疑似的な経験。今までのオレじゃ、苦戦する要素しかなかつたな」

睨み合い、回るようにじりじりと距離を詰める両者。

「だが今は違う！」

瞬間に接近し、高速で短刀を突き出す。それをボロボロの腕で防ぎ、力を入れて古内の動きを封じようと……

「毒だよ。特別性で即効性のな」

全身に回るには遅いが、傷だらけの腕を一本使い物にできなくなるには十分すぎる毒に、豚人は驚きながら無理矢理攻撃を放つていた。

「無理な攻撃は効果が薄いぞ。それも誘導されたならなおさら」

辯すらせずにそのまま膝をつく。息が荒くなり毒が回り始めたようだ。

「まともに戦うと思ったか？バカバカしい」

そのまま地面から杭が生え、簡単に豚人を串刺しにして決着がつく。

「楽に勝つことが一番だからな」

そう豚人に向かつて言つたが、すでに息絶えておりうんともすんとも返つてこない。

「はあうなんだろう……まあいいか。レベリングの続きだ」

なんとも言えない気持ちになるが、それを振り払いすぐにまたレベルングに戻るのだつた。

更に二か月

自分のステータスを眺め

「くそつ……」

上がつていないレベルを見てそう口に出る。

「あんだけ殺つてるのに何で上がつてねえんだ……」

ひたすらレベルを繰り返す古内だったが、三か月前に見たレベルから変わつていなかつた。

「トレーニングだつて欠かしてねえし、格下とは言え狩り続けてんだけ……」

毒を飲み、筋トレをし、体力を付け、技量を磨く。それに加え殲滅する気で手当たり次第の魔物を狩り続けている。無論魔導だけではなく直接戦つて経験も得ているのだ。それなのに一向に好転的な変化は訪れない。

「あと三ヶ月しかねえんだぞ……」

焦る古内。死なない期間を過ぎれば、今までのような強引で無茶な修業はできなくなる。要は強くなるタイミングが極端に減る可能性があるのだ。

これでは流石の古内でもポジティブではいられない。

「とりあえず……」
遠くにいる魔物を鑑定する。

「とりあえずだ……」

だがどいつもこいつも格下しかおらず、30レベルを超える魔物すら見えない。

「あいつらに……いやダメだ！」

時より現れる高レベルな魔物を思い出し、草原を出ようかどうか考
える。そうでなくとも、草原の中心にいつの間にか居座るようになつた風龍のような魔物もだ。しかし実力の差は絶望的に離れており、殺されるだけでは済まないのでと脳裏をよぎり頭を抱えた。
「どうすれば、いいんだ……どうすれば……」

同格が存在しない状況に、手詰まりを感じ気分が悪くなる。

「くそ、くそつ、くそつ！」

スキルも思考もフル活用して結果を導き出すが、望んだ結果は出でこない。それに大きなストレスを感じ、抑えていた声が大きくなり、表情を歪めながらギシギシと歯を食いしばる。

「勝率が低い。逃げきれないかも知れない。そもそも勝負にならない

……ふざけるなよ！」

叫びたい思いを抑え、地団駄の一つもできない。それこそ自身の望む安全や安全から遠ざかることであり、同時にそれだけ弱く無力であるという証明にしかならないからだ。

「……いや、そんなこと言つてられねえよな」

だが、逃げ場も救いもない現実を受け入れなければ進めない。目的があるのなら、生きたいと願うのなら、玉碎覚悟で挑まなければ未来はないのだ。

「要是勝てばいいんだ。どうやつても……手始めに、あいつでも殺りに行くか」

落ち着いて考え方直し、丁度良い相手を思い出す。

「たしか、草原と森の境目にいる魔物だつたな……」

そうして古内は、フラフラと目的の魔物を殺すために歩き出すのだ。それが他の相手より勝ち目が見えるというだけで、確実性のないものだつたとしても……

戦いだ

フラフラと草原と森の境界線に近づく古内。

「いたいた」

姿は見えないが、力の塊を見ていることを確信する。

「じゃあ……死ね」

そう言い地面に手を着き、土魔導を発動させる。すると地面が圧縮され、目的の場所で大爆発が起きる。そして土煙と共に大きな影が現れ

「怒つてんのか？」

煙が晴れると、そこには3メートル程度の大きな蜘蛛のような魔物がいた。

「やつぱ格上か」

・土蜘蛛

・L v 3 5

・スキル・糸術 L v 3 ・隠蔽 L v 3 ・隠密 L v 3 ・身体強化 L v 2 ・

囁碎 L v 2 ・瞬発 L v 2 ・対毒物 L v 1 ・感知 L v 1

自分の巣を破壊されて怒りに震える土蜘蛛は、素早く古内へと飛び掛かる。それに短刀を振り風刃を飛ばすが、大したダメージにならず一旦距離を取る古内。

「バケモンだな」

風刃と共に乗せた短刀の毒が効いておらず、慎重に動いているのかジリジリと距離を詰めながら隙を伺っていた。

「お前みたいな奴は、一瞬の隙で勝負を終わらせるんだろうがッ！」

土蜘蛛に話しかけるように呟く古内だが、返答は土蜘蛛の瞬発による接近により返された。それを受け止め踏ん張ろうとする古内だが、地力で負けているため自動車の衝突事故のように吹き飛ばされる。

「……そう簡単に終わると思うなよ？」

キレイに着地でき、地面を操り杭を土蜘蛛の下から生やす。だが杭の強度が負けたのか碎かれ、土蜘蛛の瞬発による攻撃が再度古内へと

向かう。

しかし――

「よつと」

土蜘蛛の視界から古内が消え、古内のいた場所で探ろうとした途端に腹が突き刺され斬り裂かれる。それに驚いた土蜘蛛は即座にその場を飛び退き、地面に開けられた子供一人分程度の小さな穴から出てくる古内を確認していた。

「不意打ちし慣れているくせに慣れてねえのか。まあ当然か」

自身が不意打ちされたことに怒りを覚え、再度古内を食い殺そうと瞬発しようとする土蜘蛛。だが体に少しの不調をきたし、思いとどまる。

「その程度の対毒物じや防げんぜ」

先ほど斬り裂いた短刀の一撃、それは浅く薄い傷だつたが、土蜘蛛を確実に弱らせていた。だがまだ足りない。この程度ではこの圧倒的なレベルの差は埋まらない。だから古内は……

「ゴリ押しじゃ！」

そう言つて攻めあぐねていた土蜘蛛に、溜めていた火炎放射を食らわせた。毒で弱らせ徹底的に弱点を突く。それ以外に勝つ方法はなく、一撃でもまともにくらうとその場でゲームオーバーだ。

「クソッ！そのまま焼き死んどけよ！」

炎の中から土蜘蛛が突進してくるのを感じし、ギリギリで避ける。そして反撃に弱つた関節部分に短刀を食らわせるが、軽く体液が出るだけで大したダメージにならない。

「毒使うな！」

即座に火炎放射をしようとする古内へ向かつて、土蜘蛛は毒を吐く。古内にとつてこの毒物は大したことないが、牽制で言えば十分だつた。その対処のために魔導を風の防御へと切り替え、嫌がらせ程度の意味しかない風刃をまき散らす結果となつたのだから。「ふうう……やっぱ風は消費がきついな」

発動の速さではしば抜けている風属性だが、出力が弱くそれを補うために効果を高め消耗が激しくなる。用意していくそれなのだから、咄嗟に出たのであればなおさらそのコストは増大するのだ。

「さて、どうかかってくる？噛みつきか？引つ搔きか？それとも跳びつつッ！」

素早く飛びつく振りをし、糸を出す土蜘蛛。それに引っ掛け身動きが鈍くなる古内へ、得意の毒液をぶつかげ弱るのを待つ土蜘蛛。

「あがあ？！」

もがき苦しみ弱っていく古内。そしてしばらくして動かなくなつた古内へ再度毒液をかけ、無反応を確かめた土蜘蛛は、獲物を持って帰ろうと古内へと近づく。

そして――

「かかつたな！」

土蜘蛛を取り囲むように土のドームを作り出し、即座に火炎を浴びせる。

「逃がさん！俺の魔力なくなるまで燃えとけえつ！！」

逃げ場を失った土蜘蛛は必死に逃げようとするが、囲まれ逃げ場を塞がれた挙句に炎で体が上手く動かない。

「ど、どうだ！魔導だけなら通じるんだよ！どれだけ鍛えたと思つてやがる！」

更に無慈悲に火炎を注ぎ込む古内。ここで手加減すればやられるのは自分だとわかっているのか、確実に仕留めた感覚があるまで限界を尽くす気らしい。

「ん？これは……」

そしてそれが功を奏したのか、力の流入を感じ取り魔導を止め確認をする。するとそこにはなんと、焦げ臭い匂いと共にこんがりと焼け焦げた土蜘蛛の姿があつた。

「か、勝つた？勝つたぞ！なんだ大したことねえじゃん！レベルも

……30超えて31だ！」

思つた以上の成果に大喜びの古内。この喜びの前にはレベルアップ酔いをも意味をなさず、湧き上がる活力がすべてを押し流していく。

「これならいける！あの龍を倒せるぞ！」

目標である龍の撃破に現実味を帯び始めるのだつた。

準備完了

あれからおよそ3か月……あと数日で生存補正が切れるところまで来ていた。

「現在のレベルは38レベ。そして風龍のステータスは……」

・風龍

・L v 5 2

・スキル・風龍 L v 5 ・流操術 L v 5 ・感知 L v 4 ・察知 L v 3

「やっぱ強い。レベルも種族も勝ち目がない……」

緑かかった西洋ドラゴンのような見た目の龍。その戦闘能力は非常に高く、まさに生態系の最上位に位置していると言つても過言ではない。それが風龍だ。

「だが俺には補正がある。どんな攻撃を食らつても死にはしない」精神が折れない限り決して死なない補正。これを軸にしてゾンビアタックをするのが狙いのようだ。

「つてことで今回レベリングと同時進行で揃えたのがこの一覧！」

そう言つて、どこの誰に話しかけているのかわからない古内は、勝手に自分の装備の解説を始めた。

「下着類はもちろん、ジーパンや長袖を中心とした旅人セット&作業着セット。やっぱこういうのだね」

そう言い作り出した机の上に並べる。

「素材はなんと土蜘蛛の糸だ。丈夫で質感もいい高品質な糸、最高！」
土蜘蛛を乱獲している最中に、糸を回収して衣類を作つていた。勿論スキルや掲示板、魔導などをフル活用して作つたので、非常に高品質なものとなつていて。

「めっちゃ大変だつたけど作つてよかつた。これが文明人の第一歩だ」

大変なだけではなく結構グロい作業もしていたが、もう慣れっこに

なつた古内は何とも思わなくなつていた。

「生産性を考えるなら蜘蛛はダメだよな。危険だし共食いするしで問題が多い。蚕とかミノムシとかか？異世界だからできるのか？まあいいや」

人間界にいけばこの技術を使って大儲け……などと考えているが、掲示板に書いている時点で先駆者がいることに古内はまだ気が付いていない。もしいなくとも問題があるのは明白だが、それも同様だ。

「次に武器はこれだ！」

そして次に出したのが武器だった。

「短刀をアップグレード！金属製に！しかも強化した各種状態異常と魔導も搭載！」

そう掲げられた短刀は、銀色の刃に紫がかつた輝きを放つていた。「俺が考えた最強合金だし、服もそうだが最大限の魔道も付与しついた。これで最強だろ。向かう所敵なし！」

土魔導を使い地道に金属を集め、火魔導で精錬などを行つてできた短刀に満足する古内。なお短刀でドラゴンが倒せるかどうかは非常に微妙な所だ。だが同時に風龍戦は、これが古内が打てる最善であるのだからこうするほかない。

「あとは投擲武器の針だ。これで遠距離も大丈夫！」

魔導が未熟な古内にとつて、投擲武器を作るのは当然だった。それに便利なものほど対策されているだろうという考え方もある。ドラゴンなんて最たる例だ。物理が効きやすいかと言われば微妙だが、魔法関係は高い耐性がありそうである。

「いけるぞ！勝つぞ！なんとしてでも！」

そう気を奮い立たせて周囲を片付け万全の装備した古内は、一気に風龍に攻撃を仕掛けたのだつた。

風龍戦

風龍の方へと走り出した古内は、速攻で土魔導を発動させ、風龍を串刺しにしようと腹の位置に杭を発生させる。

「効かねえよな！」

だが極限まで尖らせたはずの杭は刺さらず、体を動かしただけで壊されて風龍は古内の方へと顔を向けた。

「ツ!？」

その瞬間、古内は咄嗟に真横へと飛び退いた。それも全力で

「ふざけやがつて！」

転がりながら体勢を整え、針を構える。そして目も向らずそちらを確認する。するとやはり一瞬先までいた場所は暴風と風刃によりズタズタにされており、冷や汗を流す。

「くらえ！」

針を高速で投げつける。それも風龍の眼球に向けてだ。

「チツ！」

しかし届くことなく風龍を取り巻く風に軌道をそられ、その場に散らばるだけに終わる。そして針が爆発し、風龍の視界を少し妨害した一瞬で短剣を構えて急接近をかましていた。

（せめて一発でも突き刺しとかねえと！）

現状で近づけるか近づけないかで言えば、恐らく無理で絶望的だ。だが長期戦に持ち込むにしても、状態異常を使わなければ話にならない。なので古内は当初の予定通り、真正面から風龍に突っ込んだ。

「ぐウウツッ!!」

そして風龍にあと数歩で届くところで、横からの突風に体が持つていかれるようになる。それを風龍はただ見ているだけで、戦闘態勢にすら入っていない。どうやら古内の事を単なる羽虫程度にしか思つていないようだ。

「ハアツッ!!」

強化を最大まで高め、短剣にも力を回し怪しい紫の輝きが溢れれ

る。

そして――

「は？」

空に吹き飛ばされた古内は呆けた声を出していた。

「え、え、ッ！」

そして次の瞬間には最初に撃たれた風の攻撃で全身が“殴られ斬られ 捻じれ”たかのようなダメージを受け、ボロ雑巾となつた古内は地面に向かつて落下を開始した。

それは風龍の真隣に嫌な音を立てて激突し、古内はピクリとも動かなくなる。それを見下ろす風龍は、邪魔な死体を吹き飛ばそうと風を「ジンでネ、エよッ!!」

相殺され、何かしらの方法で急加速した古内は、風纏をものともせずに紫がかつた短剣を風龍に突き立てた。そして続けて、傷を大きくするためになぞるように走り出す。

「クソガッ!!

だが危険視されたのか突風で離されてしまい、着地狩りかのように大量の風刃が古内を襲っていた。それを盛り上がりさせた土の壁で防ぐが、すぐに壊されそうになつたため、次々に土壁を作りながら走り出す。

「なんだなんだ!?一発攻撃くらつただけでそのざまか!?さつきまでの余裕はどこいった!?なあ!?」

意味のない事だらうことを煽るように叫びながら風が鈍つているのを感じた古内は壁をなくす。そこ先では、明らかに顔色が悪くなっている風龍がいた。

「ああっそだつたな！お前は紛い物だつたな!!空も飛べねえ贋作だつ!!」

所詮は自然生成された紛い物。本物と比べるまでもない劣化品。

そう叫んだ古内に風刃が襲うが、精度が落ちたそれでは古内にも簡単に打ち消せた。

「調子が狂えばこの程度か!? やつぱガワだけだなッ!!」

短刀を振るい風刃を斬り裂き風龍に接近する古内。そして風纏を突破し、一太刀入れた途端に風の出力が跳ね上がり、吹き飛ばされる。「こんなもんかあつ!?

強引に体勢を取りなおし、負傷も気にせず立ち向かう。普通だつたら首の骨どころか全身の骨が折れ碎けてもおかしくない攻撃だったが、生存補正でそのすべてを受けける古内には隙が無いのだ。

「小出しでどうにかなるとでも!? それとももう限界かつ!?

機動力さえ損なわなければいい古内は、最低限の攻撃だけをかわし受け流して、それ以外は無視して攻撃を続ける。特攻に近いその猛攻に流石の風龍も防ぎきれないようで、軽いながら傷が増えしていく。そしてその度に少しづつ弱っていく風龍。

「つと、できんじやねえか!!」

そこで風龍は本気を出した。瞬間、暴風が吹き荒れ、いくつかの竜巻が発生して古内目掛けて向かっていく。

「ツ!?

流石に竜巻はくらえないと間を縫つて風龍に近づこうとした。だが途中で何かにぶつかり、抉れるまではいかないものの強い衝撃に弾かれる古内。

「空気弾か!」

そこらかしこに巻き散らかされた空気弾が、竜巻を縫つて古内へと向かつて移動を始める。

「面倒だな!」

竜巻に囮まれ、当たれば抉られ、壊せば破裂する空気弾がそこらかしこにある。おまけに奥の方では風龍が何かをしているのが見て取れた。

死はないだけ、動けないような負傷をしないだけの古内にとつて、足止めは最も警戒するものであった。なんせ時間がないのだ。

「させるかよー！」

なら強行突破だと、今度はホントに何も考えずに短刀を振りながら突っ込む。それにより打撲痕ができ、血をまき散らし、全身が軋んでいるが気にも止めない。そうやつて数秒もたたずに風龍の目と鼻の先まで近づいた古内は、短刀を振り落とす。

「ギグカツ!!」

鼻先を掠ることが精一杯の斬撃と、暴風の咆哮がぶつかり、土魔道まで使つて踏ん張る古内。そして無事耐えきった古内は、反動で鈍つている風龍に飛びつき――

「ジ、ネ、えツ!!!」

吐血しながら短刀を風龍の眼球目掛けて振り落とす。それにより片目がつぶれた風龍は、暴れ狂い古内はゴミのように地面を転がる。そこへ風龍の踏みつけが決まり、潰されながら地面に埋まる古内。

「い、でえ、なツ!!」

何度も何度も潰されるが古内は死はない。それどころか、強引に力を引き出し強化を繰り返し、風龍の踏みつけを受け止めていた。

「ガハッ！」

だがふと重圧が消え、空氣弾に吹き飛ばされる古内。

「距離ばつか、取りやがって！」

急速に治つていく古内の体。それと対照的に風龍は傷はひどくなり辛そうにしている。だがこれだけしても古内の方が不利だ。なんせ決定打がないのだから。

「生まれて初めての本気はどうだ!? 苦戦の味は!? 最悪だろう!?」

体勢を立て直される前に攻撃をしようと踏み出す古内。だがその前に風龍から近づけないほどの暴風が吹き荒れ、状態異常が少しづつマシになつていく。

「治すんじやねえツッ!?」

足を風刃で斬り裂かれ、一瞬立ち止まる。そこへ調子を戻し始めた攻撃の数々が飛来し、転がるように逃げる古内。

「クソガツ!! だつたらこつちだつて!!」

風龍に追いつくために、強引に力を引き出しドス黒く見えるほどの強化を自身に施す。その姿はまさに死んでいないだけと言った風貌で、二体の殺意の塊は向かい合う。

「最後まで、付き合つてもうぞッ!!」

そして始まる長い長い戦い。

あらゆるものを使い、使えるものを使い潰す 生存をかけた戦いの幕が、火蓋を切つて落とされたのだつた。

夢の続き

気が付くと大海の上にいた古内は、いつも見る顔の見えない女性を見ていた。

(また、この夢？)

時々見る起きたら忘れてしまう程度の夢であり、前後関係もあやふやな夢だったが、それは誰かの人生の物語のようだと直感でわかるものだった。

(なに……)

そう思つた瞬間に、影が差し、巨大なドラゴンが女性に向かつて飛んできて目の前で止まる。

(なに、はなしてんだろう……)

相変わらず音も色もわからないが、話が進むたびに少しづつ雰囲気だけは伝わってくる。

(怒つてる……？)

交渉が決裂したのか、ドラゴンが先制でブレスを使った。それは單なる炎のように見えたが、その範囲が凄まじく、恐らく宇宙から見てもわかるレベルのものだった。

(効いてない)

だが女性は無傷だ。傷どころかホコリ一つついていない。そして女性には敵意はなく、好意的にドラゴンに話しかける。

(あ……)

だがドラゴンは、ますます怒り先ほどより強力な光線のようなブレスを吐く。

それは女性の体を貫き

(やつぱ、きいてない……)

光線は星の重力を飛び越え遙か彼方へ消えて、女性は光線を透かしたように平然としていた。そこでドラゴンは、更なる力を使い再び女性に向かつて攻撃を仕掛けようとする。

(あれは……)

だがその瞬間、女性の体から黒紫のモヤが染み出した。

(なに?でも……)

ドラゴンはそのモヤを目の前で見て、不気味な感覚に襲われたのか
気分を悪くしながら慌てている。そんなドラゴンを無視して女性は
何かつぶやきながら、少し不機嫌そうにドラゴンを見つめ、モヤを制
御するかのように手を振った。

(あ……)

すると突然、上空に巨大な金属球が現れた。それは以前見た宇宙船
で、古内はこんなにもデカかつたのかどこか感心したように宇宙船
を見る。だがドラゴンは驚くばかりで、その球体の正体を知ることが
できていなかつた。

(すごい……)

次の瞬間、金属球から放たれた衝撃波と暴風が、ドラゴンを吹き飛
ばし、近くの海に巨大な水柱を立てながら叩き落とした。女性は金属
球を見上げながら、よくやつたと微笑む。

(むちやくちやな……)

彼女は、ドラゴンに害を加えるつもりはなかつたが、自分を排除し
ようとする敵には、決して手加減をしないことを示したのだ。
(はは、ばけもんめ……)

女性の指示で、金属球は再び大空に姿を消した。そして女性は、海
上に浮かぶドラゴンを見つめ、呆れたようにしながら再度要求を突き
つける。

(なにも できないのか……)

ドラゴンは圧倒的実力差を見せつけられ、何も言えなくなり、苦渋
の決断と言わんばかりにその要求を受け入れるしかなかつた。その
瞬間、世界を壊さない程度の空間の歪みと、謎の光がネットワークの
世界全体に広がり始める。

(これで、おわり……か)

世界が掠れ意識が浮上するのを感じ、見ていたものが薄れていく。
現実では何かと戦っていたのだと、夢なんて見てる暇はないのだと、
いつものようにキレイさっぱり忘れ——
(は?)

女性が最後にチラリとこちらを見たを感じ、完全にここで意識が途絶えるのだった。

仲間が欲しい……よし作ろう！

どれだけ経つたかわからない。朝日が顔を照らし、虚ろな目でそれを見る事が限界な古内は、視線を移す。

そこには、素材にならないまでにボロボロになつた風龍の死体があつた。

「勝つた。レベルも、スキルも、上がつた。これで 大丈夫だ。そのまま立てる……」

目標の強さはもう手に入れた。あと数時間だけだが生存補正も切れていない。あとは回復を待つだけだろう。

「もう、立てねえや」

強引に戦い続けた。何度も死にかけたかわからない。装備もボロボロで、自慢の短剣もすでにどこに行つたか分からぬ。ただ隙を見せれば、きっと酷い結果になるだろうと、風龍を休ませることなく戦い続けた。

「すつきり、しねえな……」

勝者は紛れもなく古内だ。だが肝心の古内はモヤモヤを残し続けている。

「虚しい、と言うか……」

風龍の死んだ目を見る。何度も目が合つた。そのすべては殺意の籠つたものだつた。

「悲しい、と言うか……」

殺し合うことしかできない。死闘の末になんとやらなど、創作物のような理想の展開などありはしないと再認識させられた。

「寂しい、と言うか……」

何度も語り掛けても意思疎通などできはなしない。全てが悪いとわかつていたし、それが単なる無茶苦茶だととも理解していた。

「ダメだな、こりや……」

それでも諦めきれずに、でも手は抜けずに殺して終わつた。少しでも気を抜けばきっと結果は逆だつただろう。現に死ぬまで弱らせ続

「でも、勝つちまつたんだから、生き残らなきやな」

古内の精神状態は非常に危険な状態だ。転生してこの方、まともに会話したことがないのだ。すべて独り言、うわ言で、その他掲示板を見る事でしか他者を知らない。それに掲示板も、ここが『最果ての大陸』だからか書き込めない。

「そうだ、じゃなきやこの戦いがムダになる」

だからこうやつて無理矢理だ、気を奮い立たせるしかない。自業自得でも、自作自演でも、単なる妄想でも使つて、強引にテンションも上げて、ポジティブになつて、進み続けるしかないので。

「それに、仲間なんて すぐにできるさ。いや、作つてやるさ」

回復したのか起き上がり、魔導で体をキレイにし、服も一瞬で着替え直す。

「世界は広い、俺はまだこの草原しか知らない」

やつと一步を踏みしめる準備が整つたのだ。まだ始まつてすらないないので。

「この大陸から出なくたつて、探せばいるだろ、一人ぐらいは……よし！」

『最果ての大陸』から出るには生半可な実力では不可能だ。それこそカンスト勢を通り越して、超越者にでもならなければ、人間界の陸地すら拝めない。だつたら『最果ての大陸』で仲間を作ればいい。数だけは数え切れないほどいるのだ、魔物なぞ。

「んく、そうだ誰にしようかなく？ 小鬼ゴブリン？ 豚人オーパーク？ 鬼人オーバーガ？ それとも亜人種ライム？」

種の方が人っぽいからそっち系か？」

背伸びをしながら考える。時より見かける強力な亜人種は小鬼だけだが、自然生成された魔物は鬼人まで知つてゐる。その他にも狼種や兔種、蟲種など様々存在するが、やはり人に似ていて意思疎通が取れそうな相手方がいいらしい。

「いや、ここは初心者にも優しいと噂の粘性生物系スライムかな？ ちよつと探

せばいくらでも出てくるし』

そう言いながら掲示板を開き、魔物、仲間と検索する。すると『魔物のティムの仕方!』や『魔物の仲間、おすすめ』や『ティムするならこの魔物!人気ランキンギング!』などの文字が見える。

「なるほど、粘性生物系は育てるのに楽だと。これは重要なだな」

そして目に止まったのが『スライムのススメ』と言うものだつた。

【普通の生物系は食事が大変。死人系は不清潔で扱いにくい。エレメンタル系やデーモン系、精霊系や悪魔系、エンジェル系、スピリチュアル系の精神存在系は格によるけど契約が大

変と、その他の種族も維持や契約に問題が多いと。スライム系を除いては』

明らかにスライム系を蠶負する書き込みに怪しみながら、先を読み進める。

「ん、確かに、最悪食事はそこらの草でもいいわけだし、持ち運びも便利みたいだな」

種類にもよるが、基本的に契約も維持もダントツで簡単なのがスライム系の特徴だ。しかも役に立つことも多く、なによりかわいいと力説されている。

「それに、人化すればいい……か。スキルとか進化とか魔法とかで、ね」

人間に近くなるように進化したり、そう言うスキルを取得されれば、人間と似た存在になるらしい。魔人族や亜人族なんかも、元を辿ればそれっぽい存在が多いようだ。

「薬のレシピは……うわっ!めんどくさ!……でもこれしないと俺の求める仲間ができないか」

スキルを取るにしても進化させるにしても時間がかかるし確実ではない。だが薬を使えば確実に人化できると書かれており、それを見た古内は驚き、次の瞬間にめんどくさい顔をする。

「技術はスキルでどうにかできても、素材とか製作のための施設も道具もない。迷宮主はコストさえ支払えば簡単に手に入るらしいけど、こつちはそうじやないんだよな」

すべてにおいて相当ハイレベルなことを求められることから、考え

込む古内。だが……

「いや、これが無かつたら結局なんにもできない。だつたら作るしかない！よし、希望が見えてきた！俺はまだやれる！！やつてみせるぞ！仲間と共に世界を氣ままに旅してやるんだ！異世界を楽しんでやるんだ！」

そうして気合を入れ直して目標が決まった古内は、風龍に死体を片付けるためにそちらに目を向け

「つて……へ？ ちよつ！ あ、ゝ待つて待つてっ！ 何やつてんだ！ お前ツ!!」

そこには一匹のスライムに取り込まれる、風龍の死体の姿があつたのだった。

スライムが、仲間になつた……はず

急いでスライムを引き？がそうと近づく古内だつたが……
「どうすりやいいんだ！」

そもそもどうやつて引き剥がそうかと盛大に悩む。ボロボロとは言え、龍の死体はそれなりに使い道があると調べはついている。できるだけ傷つけずに取り返したいが、スライムはべつたりと張り付いて引き剥がせそうにない。

「やべえどんどん溶かされていくんだけど!? スライム強すぎだろ！」無抵抗の死体を取り込むにしたつて早すぎる消化速度に更に慌てる古内。そして触れたら自分も溶かされるのではないかと手が出せず、形が崩れていく風龍の死体を眺めることしかできない。

「鱗とか外郭はさて置き、血とか肉とか臓器とかでなんか作れたかもしけねえのに！ 骨だつて！ ああそこまで溶かすのかよ!!」

骨一つ残さない様子で隅々まで溶かされる。そして古内が慌てふためく十数分ですべてがスライムの胃袋に收まり、そこには巨大なスライムだけが残つた。

「あ、ああ……なんて、ことを……ゆ、許さん！ 絶対に許さんぞ！ 貴様っ!!」

怒りに任せ炎魔導を放つために手に力を込める。

しかし――

「な――いつ――!?」

それに反応したスライムが古内へと飛び掛かり、瞬く間に取り込まれてしまつた。

(や、ヤバい！ 溶かされる!?)

粘度の高い液体の中で身動きが取れず、回復したとはいえそれは動けるだけの全快ではない状態だ。こうもがつしりと掴まれてはどうしようもない

(す、ステータスだー！俺のバカ！ 慌てててみるの忘れてた！ まずは相手の能力を確かめないと！)

いつまでたつてもダメージがないことから、生きている相手には消

化に時間がかかるのだろうと判断した古内は、一旦冷静になりステータスを確認する。

・粘性生物^{スライム}

・L v 2 2

・能力・完全吸収・緩和収束

・スキル なし

・完全吸収……取り込んだ相手のすべてを手にする。それにより最低値が決まり、再現時には自分の実力が上回っている分だけ加算される。ただし取り込んだ部分しか再現できず、スキルやレベルもこれにより吸収され、スキル取得及び素のレベルアップに大きく制限がかかる。

・緩和収束……自身の許容量を超えたダメージや負荷を受け付けない。あらゆる不都合は、緩和され収束して消えてなくなる。

(はあ?!バケモンやんけ!どうせいちゅうねん!)

風龍なんぞ比べものにならないほどのバケモノ具合に突っ込みを隠せない古内は

「おぼあがおぼ……」

誤つて口を開けてしまい、中にはライムが中へと流れ込んでいた。

(息もできねえのに!ふざけんな!)

形は保つていてるもの、体内は外見よりもボロボロであり、そこを攻撃されてしまえば残り時間を苦しみながら終えることになるだろう。

(どうにか、どうにか……ん? 苦しくない?)

そこでとあることに気が付き、古内は普通に呼吸のようなことができていていることに気付く。

(なんで? 油断させようとしてる? それとも俺つて最初から呼吸に空気必要なかつた?)

種族も能力も不明な古内は、まさかそう言う種族だつたのか!? と一

瞬希望が見えたが、結局行動できない事には変わらず、冷汗を流す。

（どうしよう。でもダメージもないんだよな。なんか全身触られてるだけみたいな。まさか俺が窒息するまでまつてんのか？）

攻撃能力はホントに無いようで、溶かされている感じもない。全身を触られている感覚はあるようだが、これにどういった意図があるのか古内には分からなかつた。

（再現つてことは、さつきの風龍とかにもなれるんだよな？死体とはいえ取り込んだんだから。さつさと風龍にでもなつて……まさか取り込み中は変身できない？それとも俺の解釈が間違つてる？）

鑑定などの相手の情報を見るものは、実力差が離れていたり、能だつたりすると見れる情報に制限がかかる。特に能力の場合は、システムの解析次第なので、複雑なものは結構いい加減だつたりする。

（まあ何でもいい。ともかくこの状態をどうにかしないと。まずは魔力を外に出せるかだ）

仕方がないので一つ一つ試していくことにした古内は、手始めに魔力を体外に放出した。

（ダメだ食われる！それどころか流れを辿つて……こいつが何もできないのが唯一の救いか……）

流れを把握され内部へと何かを流し込まれる。しかしそれだけで何かをしてくると言うことはない。ただ居座るだけで何もしてこないのだ。

（おかしい、いくら攻撃能力がなくともここまで入り込まれたら簡単に俺を殺すことが出来るはずだ。なのに何もしてこない。何考えてやがるこいつ？）

もうすべて掌握されかけている。すくなくとも古内が自分で感じる部分はだが、それだけでも十分すぎるのだ。

（……こうなつたらやるつきやねえ、こいつと契約して仲間にしてもる）

少しづつ侵食されている。全てを奪い取るかのようにだ。だから古内は、先手必勝として、魔力を操り水ライムの中へと染み込ませる。

(抵抗がない？想定外？それとも……いやなんだつていい。こうだ
！)

スライムの体内で契約の魔導を使用し、それは抵抗なく行われ契約
を済ませる。

(なに!? 急に動きが!? 成功したはず……!?)

契約は滯りなく終わつたのだが、その瞬間にスライムは古内のこと
を満遍なく触りだす。それに驚いたと同時に意識が薄れ

(ダメだ、意識が、眠い……)

完全にど切れるのだつた。

何とかなつた。

柔らかな風が顔に当たり、古内は目が覚め周囲を見渡す。
「なにも……いやいる？」

スライムとの繋がりを感じ、立ち上がり周囲を良く見渡す。
「成功したのか……それに調子もいい。まさかあいつがやつたのか
？」

傷一つもないどころか、今までにはほど調子がいい事に気が付いた古内は、その調子でスライムとの繋がりを辿って探そうとした。だがその必要はなく、ズルズルとあちらから草をかき分けやってくる。

「お前だつたのか、スライム……」

一応警戒はしていたが、間違いなくスライムだつた。そして返つて来た返答が……

「え？・くれるの？」

デカい葉っぱと共に何かの肉をポツと吐き出し、目の前に差し出すスライム。一応繋がりができたことで、スライムが伝えたいことが古内にもぼんやりと理解できた。それは友好の印と

「名前が欲しい？まあそうだな。スライムじや味気ないしな」

判別もつきづらいし、この際だから要求通り名前を付けた方がいいだろうと考え込む。

「うーん？・スライムだから……」

気の利いた名前を考えようと頭を悩ますが、いい名前が出て来ない。自分のような前世でよくある名前などではなく、せつかくなので異世界っぽいかっこいい名前にしようとブツブツと呟きスライムの様子を見るが、どれも反応がよくない。

「……ライム？・とかどうだ？」

スライムのスを取つただけの簡単な名前。だが響きがよく、かつ探索せばいそうな名前なのでどうだ？とスライムの目？を見つめる古内。「おー受け入れてくれるか！よかつたよかつた！」ついでに俺の苗字もやろう。特に凄いもんじゃないけど

しばらく経ち、スライムは気に入つたと言う反応を見せ、ステータ

スでも確認してみるとばっかり『古内 ライム』の文字が書かれていた。

「にしても腹がすいた。せつかくだしお前も一緒に食おうぜ。俺は料理が得意なんだ」

今までにないほどの空腹を感じ、目の前の旨そうな肉を持ち上げる古内。そして魔導で近くにあつた大きめの石を切り出し、それを熱し始める。

「スペイスは……まあ適当に薬草とかでいいだろ」

今までため込んでいた香料になりそうな薬草っぽいものを使って、肉を柔らかくするために叩きながら擦りつけていく。

「調理器具とかも作らなあかんな。生存補正も終わつたし、草食つてばっかじや栄養失調で死にそудだし」

今までは適当に草を食つておけば腹が膨れていたが、寝ている間に生存補正が切れたこれからはもういかない。それに今までまともなものを食べられなかつたから、これからは美味しいものをたくさん食べたいとも考えていた。

「人間界に行つたら美味しいもん一杯食つてやるんだ。この肉みたいな……」

肉を焼いていると、旨そうな肉汁と匂いが漂いよだれが垂れる。前世で一人暮らしで自炊したり、美味そうだな」と見ていた料理動画、そして何より今世で手に入れたスキルでそれなりのものが作れるようになつたのだ。

「ん？ そういやこの肉、何の肉だ？」

そこで気が付く。この肉は何の肉なのかと？ 古内は転生してこの方肉など食つたことがない。食わなくてもよかつたと言ふこともあらが、それらしい食材を見つけられなかつたからだ。

「え？ オーク？ 食えんの？」

そこでこの肉がオーク由来だと知る古内。元々こういう肉なのか、それとも特殊な下処理をしたのか、古内は頭を悩ませる。てかそもそも寄生虫とか病原体とか大丈夫だろうかとも思つていた。

「ま、美味そだしだし大丈夫だろ」

とは言え古内は、生存補正ありきとは言え、よくわからないものを食いまくつて来た経歴がある。なので別に腐つてたわけでもないから火通せば大丈夫だろうし、何より耐性も高いから大丈夫だろうと判断した。

「よしできた。これお前のな」

デカいステーキを二つに切り分け、ライムへと渡す古内。そして思いつきりかぶり付き

「美味しい！豚顔っぽかったからもしやとは思つてたけど、まさに豚肉の厚切りステーキだな！」

ムシャムシャと美味そうに肉を頬張る。ライムも一口で取り込み、中で切り分けながら消化して満足そうだ。

「へゝ情報系のスキルで分かるんだ。てことは掲示板でも……あ、普通にあつたわ。和食再現とかもある。あつち出身の奴もいるんだな」

食べながらチラツと探してみたら、どうやら魔物は食用にできる種類があるらしく、オーパクは豚肉そのものだと書かれていた。今まで特に困らなかつたし、余裕がなかつた古内は見過^ごしていたのだ。

「にしても情報系か、一応スキルには入つてるから使えるちや使えるけど、ここじゃ本家に劣るんだよな」

これは古内が使い方がイマイチわからないという事だ。技術系は感覚などに働きかけるスキルなので、補助しやすいので古内でも十全に扱える。それに対しても情報系は、知識や学などを覚えやすくしたり、違和感のない程度に与えるスキルなので、その知識に触れると言う前提がなければ持つっていても大した効果はない。

「へゝ所有者はそれなりにいるけど、高レベル保持者は結構少ないんだ。大半は技術系で補えるからかな？まあ前世でも学者とかは少なかつたし、豆知識とか雑学程度じやこんなもんか。一般人なら最悪なくとも困らんだろうし」

感覚が優秀すぎて、それで大半は解決してしまえるので、詳しく深い知識を付けずに終わることが多いらしい。そもそも頭を酷使する

ことなんて少ないだろうし、広く浅くでは大して高レベルにはならない。てか持つていなくても、普通に生活する上で特に困らない者の方が多いのだ。

「つと、ご馳走様！いや～久々の肉は美味かつた！ありがとな、ライム」

大満足の古内と、おいしかったですねと同意するライム。そして古内はライムに向き直し

「改めてだが、これからよろしく頼む」

そう言うと、ライムも「ちらり」と意志を飛ばして、より強い繋がりができるのだった。

これからのこと

食事を終えた古内とライムは、これからのことについて話し合つていた。

「……」を出るには強くなるしかないんだよな。で、どこ行けばいいと思う？」

明確な返事も返つてこないだろうし、そもそもライムも知つていることは少ない。相談相手としては不足しかないが、それでも話し合いぐらいはできるとしていた。

「あるのは、東西南北で“森林”“荒野”“山脈”“湖”だよな」

現在古内たちは、大陸の中心部にある安全地帯と化している草原にいる。そこから東にジャングル？のような大森林があり、西にはどこまでも続く荒野みたいなのが続いており、南にはそびえ立つ山脈があり、北には巨大な湖と奥の方には湿地らしきものが見えていた。

「一応調べてはみたが、見なくてもわかるぐらい強い気配が蠢いてんだよな。どこも」

ライムも肯定するように上下に揺れる。何度も足を運ぼうとした古内だったが、風龍を超える気配を複数感じ、探索を断念していたのだ。

「風龍倒して強くなつたが、それでも山脈以外は尻込みするな。だつてここからでも感じるぐらい強そうだし」

隠す気のない強大な気配やエネルギーを感じ、一瞬にして三つの候補を切り捨てる。だが、だからと言つて山脈がいいと言うわけではない。

い。

「隠密とか隠蔽が一番厄介なんだよな。避けるの難しいし、不意なんて突かれたら一巻の終わりだな」

基本的に格上しかいないこの世界で、弱い古内たちが生き残る方法は、大人しく逃げ隠れておくことである。だから決して真正面から強敵に挑んだり、不意を突かれてはいけないので。

「ふうん。じゃあ山脈にするか。準備どうしようか？」

なんとなくライムの意志を感じ取り、山脈に決めた古内。だが何の

策もなく行くことはできない。下手したら草原から出た瞬間に、強敵と出くわして殺される可能性もあるからだ。

「まず俺のステータスだが」

そう言つてライムに教えるついでに自分のステータスを見る。

——ステータス——

・名前	古内 明理	/ 年齢	5歳
・性別	女		
・種族	不明		
・LV	45		
・能力	不明		
・スキル	成長補助LV6		

言語理解

「中々強いだろ？まあ今考えればそうでもないんだろうが」

自分がどこまで強いのか、何ができるのかを伝えていく。古内にとつて、それがライムの理解に繋がっているかどうかはわからなかつたが、それとない反応をするライムに、ついつい話すのが楽しくなつてペラペラと喋り続けていた。

「で、ライム。お前は何ができる？つて、うおつ！すげえ！」

それに答えるようにライムの体が膨張変形し、小鬼の姿となつた。「今まで取り込んだ魔物の姿になれるのか？」

豚人や鬼人、狼や兎などなど、この草原にいる魔物には大体擬態でき、その力も相応に操れるようだ。

「まさかお前、俺の倒した魔物を取り込んでいたのか？」

他にも見せようとしてくれているのか、少し長く粘土細工のように

変形しているライムにそう聞く。

「どうか。だから感謝してると。良い奴だな」

どうやらライムは、古内が倒して放置した魔物を取り込みまくつてきたようだ。そうやつて強くなってきたので、相当感謝してくれている様子。あと取り込んだのも攻撃の意志はなかつたとのこと。

「完全な状態の風龍にはなれない？情報が足りないから？」

色々質問していく中、どうやらライムは擬態対象の情報の入手具合でその再現度が変わるらしい。一番はそのまま取り込むことだが、そんなこと中々できないので数で補わなければいけないとのこと。

「ん？これは？」

ライムの擬態が完了し、驚く古内。長くストレートな灰色髪に穏やかそうな同じ色の瞳、短髪オールバックで鋭い目つきなどころ以外は自分とそつくりのライムが立っていたからだ。

「あの時回復ついでに俺の情報を？でも完全じゃない？時間がかかる？」

少し改造されているが、見た目の擬態はできる様だ。だがそれ以外の部分はさっぱりで、言葉も話せなければ、長時間の維持もできない。これから成長と古内情報提供次第と言つたところだろう。

「いやいや十分だ！あとは言葉と擬態の強化だけだろ！よし！これは思つた以上に速くできそうだ！」

ライムを育てればこの孤独も大いに改善される。現状それっぽくしか意思疎通できないし、一方的に話しているようで少々味気なかつたので、古内にとつては大歓迎もいいところだ。

「つと、そだつたな。山脈に行くことについて話さなきやな」

興奮して話がそれてしまつたが、ライムに促され話を戻す。

「レベルリングは期待できないから、まずは装備を万全に整えてだな。その後に少しづつ調査を……」

そうして古内とライムはこれからのことについて詳しく話出すのだった。

さあいざ山脈へ！

なんやかんやで一ヶ月ほど時間をかけて準備を終わらせた一人と一匹は、山脈へと足を踏み入れていた。

「麓の方は森で、上に行けば行くほど動植物が少なくなるか。普通の山脈と変わらないな。頂上に行つたらいい景色が眺められそうだなあ、ライム」

服の中に入れたライムに話しかけながら、鬱蒼と茂った森の中を歩む古内。その足取りは慎重で、気配も最小まで抑えて周囲に溶け込ませている。独り言も口には出しているが、外には響いていない。

「雲に届くぐらいだもんな。いくら強力な植物でも流石にそこまで繁殖はできないか。それとも……」

詳しく述べ古内でもわかる程巨大で、低く見積もつても標高3000メートル以上はありそうな山脈だ。きっと頂上かその先に強力な魔物でもいるのだろう。

「まあいいや。にしてもライム。お前の案は凄いな。自分が防具になるつて」

話を変え、ライムを褒める古内。それに好印象を抱いたのか、ライムは少し揺れて古内はくすぐつたがる。

「おお、揺れるな揺れるな、くすぐつたいって。で、隙間を狙われてもお前のお陰で防げるし、怪我しても覆つて回復してくれるなんて至れり尽くせりだな。それに持ち運びにも便利だ」

現在のライムでは、便利でも戦力と言う面ではあまり期待できないし、古内の戦闘についていくこともできない。そのためサポートに回ろうと話し合つたのだ。

「しかも邪魔にならないし、重くもない。何なら強化までしてくれることは、お前俺より魔法使い熟してるな？」

ライムは何でも真似て使い熟す天才だと言つていいだろう。魔法や魔術に限らず、情報さえあれば能力までも思うがままだ。汎用性や万能性で言えば、古内とは比べるものおこがましいほどの差がある。「なにより回復してくれるのはホントありがたい。俺も怪我しないよ

うに頑張つてるが、どうしても上手く行かなくてな。致命的だからどうにかしたいんだがな……」

今まで練習はしてきたものの、心底では生存補正に頼り切つて来た節がある。そのため回避や防御が疎かで、勢いに乗ると強引な攻撃もいとわなくなる癖がついていた。

「幸いタフなのと回復が速いから多少は無茶が効くんだが……ああ、悪い悪い！そういうことは止すから怒んなよ……」

もつと体を大切してくれと、ライムから怒りを受け悪い悪いと謝る古内。ライムとしても、折角の仲間を失うのは嫌なのだろう。だから全力で抗議しているようだ。

「そうだな。お前が守つてくれると安心だな、ライム」

はて？これは、信頼している証か、それとも介護してくれ宣言なのか？ライムにはわからなかつたが、頼られている気がして悪くないのか大人しくなるライム。

「ま、それにゆくゆくは俺と肩を並べて一緒に戦おうな。当分先になるだろうが、それまでには俺も立派になつてるだろうからさ」

ライムが力を付けるまでの間はこのスタイルで行くと決めている。だが古内は分かつてているのだろうか？他者を真似れるライムの成長力と言うものを

「つと、そう言つてたら魔物のお出ましだ。やるぞ」

そして魔物の気配を感じ取つた古地は、戦闘態勢に入るのだつた。

狼戦

狼に囲まれた古内は、周囲を確認しながら武器を構える。

「すでに囲まれてたとは、俺もまだまだだな」

そう言いながらステータスを確認した。

・ 緑 グリーンウルフ 狼

・ L v3 5 ~ 4 0

・ スキル・擬態 L v4・俊足 L v4・嗑碎 L v3・嗅覚強化 L v3・

連係 L v2

「おいおい、中々の連中じやねえか」

レベルは見ての通りで、数は七体ほど。森の木々や霧囲気に擬態しているため、集中しないと数え間違えるほどの精度だ。

「スキルのお陰か？いや、スキルは普通よりできるところの表記でしかない。強みであり主力であつて、それだけじゃない。あれはこいつらの力そのものだ」

隙なく短刀を構えているため、狼たちは襲つてこない。精々警戒しながら周囲をゆっくりと移動しているだけだ。

「異物感半端ないんだろうな。だからすぐ見つかつたと、匂いとかも考えとくべきだつたな」

スキルに頼りすぐるのも悪いと思つた次の瞬間、痺れを切らしたのか狼たちが襲い掛かってくる。

「ほれ、ほれ！」

二体の狼が木の陰から素早く距離を詰め、古内を食い殺そうと飛び掛かつた。だがそれを簡単に回避され、斬り裂かれる。

「おつと！」

体勢が悪くなつた古内へと三体目の狼が襲い来る。だがそれもギリギリで回避し、軽く斬り裂きつつ距離を取り、威圧をもつて牽制した。

「状態異常の味はどうだ？」

最初の二体は傷が大きく急所に入っているのか既に瀕死で、三体目は傷は軽いが状態異常ですぐにでも体調を崩していた。

「残り四体か……じゃあ次は俺からいくぞ！」

そう叫び近くにいた狼へと襲い掛かる。それに驚いた狼は、咄嗟に身を引こうとするがもう遅かつた。判断を誤った狼は、首を斬り裂かれ、血をまき散らしながら絶命する。

「次ッ！」

それを合図に残りの狼たちが敵討ちかのように迫る。

「いい連係だな」

目の前の一体をやれても、あとの追撃でやられてしまう。かといってここで逃げれば、流れ失つて戦闘が長引く。

「これならどうだ？」

地面を棘状に操作し、目の前の三体を一気に貫く。それにより瀕死又は絶命まで行つた三匹は動かなくなる。さつきのはあくまで近接戦での話であり、魔導を使えるのなら何の問題もない話であつた。「擬態で動きとか距離感が分かりづらかつたがなんとなかつたな。じやあさつさと……」

血の匂いに誘われて他の魔物が寄つてくるのを避けるために、さつきと死体回収してトンズラここうとしたその時だつた。

「ツ?!こいつまだ!?」

視界外から倒したはずの三体目が古内へと噛みつく。それを避けきれず足を噛まれ、骨が折れる感覚を味わる古内。

「こいつッ!?死にぞこないの癖に!!」

スキルがある程の強力という事なのだろう。瀕死の状態でも古内の足から離れない。凄まじい執念だ。

「くたばれ！」

このまま手こすつていると、逃げきれなくなると判断した古内は、即座に狼の首を力任せに斬り裂き、力が緩んだところで逃げ出して、ライムによる治癒が始まる。

「すまんライム。ここまま行くぞ。補助頼む」

そして古内は、連戦を避けるために、魔導で風の流れを操作しつつその場をそそくさと離れるのだった。

森の中、山脈の麓

傷も完全に癒えて、森の中を歩む古内は、山脈の麓まで来ていた。

「ここで何か取れればいいんだがな」

古内の目的は鉱石や素材の採取だ。だから山脈に来ている。

「……どうやるんだ？」

そこで古内は気づいてしまった。どうやって鉱石を取ればいいのかわからない。漫画のようにたまたま見つけられるわけでもなければ、ゲームのように都合よく剥き出しになつてているわけでもない。そもそも場所や鉱石の種類すら眞面にわからない。

「そんな時は、掲示板頼りだ！」

ライムの呆れ氣味の反応を感じながら、掲示板を見てお目当てのスレを探す。

「なるほどなるほど、画像付きとは随分と手厚いじゃないか」

そう言つて、次々に流し読みして必要事項を覚えていく。その間無防備なのだが、ライムがちゃんと警戒しているので安心だろう。

「よし！大体わかつたぞ。まずはこうやって、手を地面とかに置いて

……」

手を地面に置き

「力を一気に広げる！」

限界まで自身の体内を流れている力を、周囲の力を巻き込みながら広範囲へと広げていた。

「そ、そし……て！」

土魔導を使い、地形を操つていく。

「抜き出すッ！」

地面から何かが抜け、古内の目の前に大きな金属の塊が現れていった。

「はあはあ……どんなもんじやい！」

そう言いぱたりと倒れ、ライムに介護される。どうやら勢いに任せすべての力を使い切つたようだ。バカなことこの上ない。

「これをどうにかして分けなきやいけないわっか。あと製造方法とか品質とか、種類とか物質の比率とか……」

倒れながら取った金属の事を考える。とりあえず一か所に集めただけであり、どういった成分が含まれているかまでは分からない。しかも製造法も詳しくは知らない。

「鑑定とスキルと掲示板で探すしかないか」

要はしらみつぶしだ。一つ一つ探していく必要がある。幸いそれをするだけの便利なシステムがあるから、時間さえあれば大した問題ではないが、なければよくわからない合金で武器を作っていた所だろう。

「えーと……え!? マジっ!? 魔導でちやつちやつとつくれんの!?

だがここで大きな壁にぶち当たった。どうやら金属加工にはそれなりの施設が必要のようで、まずはその準備からしなければいけなくなつたのだ。因みに魔導だけでもできなくはないが、きっと古内の頭では理解しきれないので、碌なものはできないだろう。

「一からか……こりや大掛かりな作業になるな」

言葉の通り今の古内には、スキルと知識ぐらいしか真面な物がない。そしてその二つも古内には手に余るものだ。

「まずちやつちやつと鍛冶場のようなもん混ぜた家でも作つて、そつから調整していくか……」

だがやつてみないとわからないと、回復した古内はバク転で立ち上がり、さつそく作業に取り掛かる。なんせこいつには、時間だけはいくらもあるのだから……

完璧無欠の家が出来たぞ！

とある大きな平屋なのか二階立ての家なのか微妙な建築物の前に、腕を組んだ古内が経つて満足したような顔をしていた。

「あれから二年。ついに俺の住居が出来上がった」

そう言い、謎の思いで話に入り出す。

「最初のころは大変だつたな。建築資材の確保とか、魔物との抗争とか」

資源と土地の確保のために自然破壊はお手の物。その際に近くの魔物を殲滅させたり、逆に殺されかけたり、逃げ回つたり、敗走したり……そうやつて現在七歳になつており、作り始めておよそ二年。ステータスの年齢部分で確認したので間違いないだろう。

「二年かけた最高の一品。よくここまでできたよ。そう思うだろ、ライム？」

服の中にいるライムにそう話しかけ、ライムも肯定の意を示す。そして伊達に二年経つていないと言わんばかりの完成度に、大満足な古内。ライムと協力して、超人的な身体能力と魔導、掲示板とスキルの叡智を駆使し作り上げられた一軒家だ。

「鍛冶は勿論、普通の住居としても成り立つし、増築も可能。その他思い付きで色々設備も付けたしな」

近代化改修前提もお手の物。魔導を駆使して、前世の家電や鍛冶工房などの現代設備をふんだんに取り入れた施設。ガス溶接やアーケン溶接などもできるようにしてあり、最終的には3Dプリンターでの道具作成なども考えていたりもする。これぞ近未来道具とも言えよう。

「初めの頃は建築が全くうまく行かなさ過ぎて、武器とか道具作りに途中迷走したり、油断してたら魔物に家破壊されて一からやり直しかあつたけど、いい思い……」

感慨深く思い出を語り、過去を深く思い出す。その内容はポジティブなものではなく、大変だつたと言う記憶だ。そして思い出が増える

度に、段々と雰囲気がおかしくなつていく。

「でなわけねえーだろ！なんであんなに簡単に崩れんだよ！魔物の襲撃もふざけんじやねえー！わざわざ結界まで張ったのに見つけ出るんじゃねえよ！」

イラライラが爆発する。その内容は正直言つて当然のものだつた。こんな危険地帯に住んでいるのだから、すべてがアニメのようにうまく行くはずがないのだ。

「確かに情報はあつたがな！詳しい事は曖昧で分かりずれーんだよ！てかちゃんと書かれてねえーんだよ！スキル無かつたらこの程度じやすまなかつたぞ！」

建物を建てる立地や条件、知識や技術などなど、古内には足りないものが多すぎた。そのせいで大分苦労したのがうかがえる。

「確かに、当然だろうな！基礎も学ばずにこんなところでいきなり本格建築始めるとか想定されてねえよな！だつてあれ、スローライフスレだぞ！馬鹿か俺は！」

しかもいきなり理想の自宅の建築である。無謀にも程がある。もう少し過程や段階を踏んだり、していくのが妥当だろうに、なんとかく出来るだろでやつてしまつていた。そしてそれで成し遂げられたのが奇跡だろう。

「はあはあ……まあいい。できたんだから愚痴はこれぐらいにしておこう」

随分苦労したし、遠回りだつた気もしなくもないが、そこは超人スペックとスキル、ライムとの協力でゴリ押ししたのだ。スキル万々歳である。これからもよろしく感が凄い。

「さて、自宅もできたし、やるか、探索！」

そして建築のために中途半端に中断していた探索を開始するため、張つていた結界から出るのであつた。

森の探索

結界から出た古内は、森の探索のために気配を薄めて地図を持つて歩く。

「七歳か。レベルも50超えたし、スキル7になつた。上々だな」

転生して七年。前世の記憶も薄れ、ライムと今世を楽しむ事が生きがいと化している残念転生者、古内。

「迷走中に武器も作つたし、道具も揃えた。家作つてからやるんじゃなくて、同時進行しちまつたな」

新しく作った装備を思い返しながら、短刀を取り出す。

「何度見てもいい出来だ」

ダマスカス鋼のような綺麗な刀身。可能な限りあらゆる金属の合金を試し、その最適解で作り出された合金刀の一つ。その性能は素晴らしいの一言であり、刃物として理想的な仕上がりでできている。

「やっぱ俺には短刀が似合つてるな」

因みに短刀に拘っている理由は、扱いやすく愛着があるのと、単に身長的な理由で長物が扱いづらいからだ。古内は別に腕力が強いわけでもないので当然だが。

「予備も複数あるし、役に立つかどうかわからんが一応他の武器も用意してある。完璧だな」

当然予備も他の武器も複数持つていて。スキルのお陰で最低限は扱えるので問題ないだろう。それにどれだけ強力だろうがいずれは壊れるし、弾かれてはい終わりではたまたまつたものではない。幸い所持容量は亞空間でどうにかなるので、嵩張ることもない。

「ライムも俺と同じ姿になれるようになつたし、あとは喋れるようになるだけだな」

そしてライムも古内と同じ姿になれるようになつていた。とは言え、ライム曰く戦闘が出来る程度に安定しただけであり、言葉も喋れなければ生物として細かいところを完全に真似られている訳ではないようだ。なので今もそうだが、完全体になるまでは古内の中で補助に徹するとのこと。

「そう言やライム。あの泥人形ゴーレムと小鬼たちどう思う？」

適当に歩き続けて、それなりの範囲の地図を浮かび上がらせた後にライムに話しかける。因みにこの地図は魔道具で、行つた場所の地図を勝手に作ってくれるものだ。

「アダマンタイトゴーレム金剛人形はここいらで一番強い奴だ。レベルが87もある。他の地域のカンスト勢とか超越種に比べたらマシだけど、今の俺たちじゃ勝てない相手だ」

アダマンタイトゴーレムは、この山脈近い森の中で一番強い魔物だ。4メートルに近い巨体でその名の通り、全身アダマンタイトと言うこの世界で最も硬い金属の塊でできた魔物である。

「魔法も使わなければ能力もない。ただ硬すぎて攻撃が全く効かないし、あの質量攻撃は脅威だな」

アダマンタイトは変形どころか欠けすらしない超固く重い金属だ。そして魔法や特殊能力を一切通さない性質もあり、その耐性は極め抜かれている。そして防御性能は、古内の攻撃は勿論、超越種の攻撃も防ぎきる。そのお陰で、本人が動いている以外の特殊能力が全くなっている。

「世界三大金属の想輝鋼オリハルコン、金剛アダマンタイト、妖輝鋼ヒビイロカネ。その内の一つが大量に手に入ると考えれば、ぜひ倒しておきたいよな」

本音はこれである。アダマンタイトゴーレムを倒して、貴重なアダマンタイトを大量に取りたいのだ。一応古内もすべての金属を所持しているが、この三つに関しては合金としてしか使えない程度の量しか持ち合わせてない。

「にしても他の二つは見つけられなかつたな。魔銀ミスリルは少ないけど鉄アイアンと青銅ブロンズは普通にいるのにな」

この山脈には様々な金属が集まっているようで、様々なゴーレムが大量に生息している。そのため素材には困らない。困れば適当なゴーレムを狩ればいいのだから。

「まあ、それはさておき。小鬼……がいるな」

視線の先に小鬼を見つけ、短刀を構えるのだった。

小鬼たち

木々に隠れて三体ほどの小鬼の方を見る古内は、さつそくステータスを確認した。

・小鬼ゴブリン

・L v 5 3

・スキル・斥候 L v 5 ・心体強化 L v 4 ・対物理 L v 3 ・対異常 L

v 3

・小鬼ゴブリン

・L v 5 5

・スキル・戦士 L v 5 ・察知 L v 4 ・対物理 L v 3 ・対異常 L v 3

・小鬼ゴブリン

・L v 5 8

・スキル・術者 L v 5 ・探知 L v 4 ・心体強化 L v 4 ・対異常 L v 3

3

(うえ、つえ！格上じやん！)

各自役割におつたそれなりの装備を身に着けた小鬼たち。一対二なら割と余裕で倒せそうだが、三体相手は正直言つてムリと言う差があつた。

(正直あいつらの上位互換もいるし、なんならあいつらが集団でかかつてきただけで死ぬ自信がある)

補正モリモリの古内にとって、単に基盤レベルが高いだけの敵ならどうにかなるが、残念ながらここ最果ての大陸の魔物は、軒並みスキルの練度も高いので、今の古内は徹底的に戦闘を避けなければ生き残れない。

(ん、魔物?)

そんなことを思つていると、茂みを分けながら大型なクマが現れる。

・銅熊 『ブロンズベアラー』

・LV48

・スキル・体術LV4・嗅覚強化LV4・強靭LV3・対異常LV

3

そいつを確認した瞬間、慣れた手際で小鬼たちは戦闘態勢に入り、簡単な術も仲間にかけて、その追加の準備もできていた。

(小鬼つてこんな強かつたけ?)

改めて今まで見てきた小鬼と前世で読んでいた小説などに出てきた小鬼を思い出し、そう思考を巡らせる。

(あんなに賢くないし、鍛え上げられてもないよな)

戦士が前に出て、クマの攻撃をスレスレで躲しながら斬撃を仕掛け。それによりクマは斬り裂かれるが深く斬れなかつたようで、痛みに悶えながら反撃をしてきたクマから一旦距離を取つていた。

(外傷氣にしてんだな。賢い)

少ない手数で斬り殺せるように強化を更に強める小鬼。いくらレベルが上でも、基礎が違うのでこうやって強化しないと都合の良い戦いはできないようだ。

(強いし上手い!俺よりも!)

先ほどよりも明らかに速くなつた足取りで、クマに攻撃を仕掛ける小鬼。その一撃一撃は、あとの事を考えているのか、急所と言うか筋や関節などを的確に斬り裂いていた。

(おお、そうやるのか。観察の一つでもしどければよかつたな)

それを興奮したように見入る古内。古内も何度も倒したことある魔物とは言え、あんな手際よく戦えない。そして今まで関わらんとこと避けていたことを少し後悔していた。

(最後は首を斬り飛ばす氣か!よくつ……)

戦士が最後の仕上げと言わんばかりに、動けなくなつたクマの首を派手に斬り飛ばし、古内は頭部に衝撃を感じ、意識が吹き飛ぶのだった。

夢だ

白を基調とされた神殿、そのどこかの一室で、いつも見る女性が神かそれに至ったと思われる男の前に立っていた。

(またこいつだ)

女性はどこまでも温和にニコニコとした笑みを見せて、神に話しかけていた。それに対し神は神妙な面持ちでその話を聞いてきた。

(こいつが誰かのかわかつてきた)

プロジェクトでなにやら映像を見せながら話している様子はさながら営業マンだが、相変わらず内容も声も聞こえない。だがなぜかこの女性の名前が分かつていた。

(木枯 和夜か。マジで誰なんだ?)

そう考えていると、時間が進み発展した星をバックに神々たちに囲まれた木枯の姿があり、星のすべてが観測機の作り出した構造体によつて覆われていた。

(嘘はついてない。悪気もない。ただ交渉が決裂しただけか)

木枯が何をしたのか、大体分かる。彼女は嘘も偽りもなく話し続ける。ただひたすらに現実を語り続ける。それに対し神々が怒りの表情をしていた。

(木枯のした事はどうなんだろうか? わからない)

いい未来を見せてやつた。そうなるように協力もしてやつた。だがそれは神々と協力者である木枯にとつての都合の良い未来だ。その結果この星は終わりを迎えていた。

(意思のない星を食い尽くした。治すなんて不効率でムダだからこの星を離れるように助言した。何なら改造してやろうかと。なのに争いが起きている)

木枯は正直者だ。だが聞かれた事と言いたいことしか話さない。示すデータに嘘偽りはなく、平均的で最頻値で中央値的な普通のデータを見せ続けただけだ。誰もが納得し安心しただろう、その結果がこれだ。

(星の内側で争いが起きて、木枯は黙っていた。別にそこまで契約した覚えがないからだな。その間も求められた結果は出し続けたはずなのに)

劇的な発展に神も星も耐えられなかつた。それで利益を得たのは、木枯と観測機だけだ。神秘も資源もすべてこいつらに吸い上げられていた。

(囮まれて感情をぶつけられて、あいつは――)

それは決して契約違反でも何でもないのだが、こいつが元凶だと目の前の木枯を殺そうとした結果が、契約の破棄による争いである。(残念そうにするだけか。わかってる)

次々に木枯へと攻撃を仕掛け、向かって行く上位の神たち。

(お前からすれば、無数にある可能性を一つ潰しただけだもんな)

そのすべてが、何もできずに殺されていく。

(もつたいないから星も取り込んで)

星もどんどん解体されて行き、観測機の中へと落ちていく。

(何も残らない。誰にも知られることなく消えて……いやあいつの中で残っていくんだな。ちゃんとしてやらなきやダメだから……)

隔離され、隠蔽された小さな世界はの中で、観測機にすべて回収されていくのだった。

村だつたぜ

ベシベシと叩かれ目が覚める。

「ここは……小鬼？」

寝ぼけた様子で周囲を見渡すと、どこかの大きめの木造建築の家中で目が覚めていた。しかも周囲には小鬼が何人かおり、外にもいる事が気配で分かつた。

「だれ？ てか俺はこんな所にあるん？」

少しづつ意識が覚醒してきて、疑問だらけになる。そもそもそうだろう。小鬼に気絶させられたのにも関わらず無事に生きているのだ。

「……ライムのお陰か」

モゾモゾと服の中で蠢くライムに気を向け、そう呟く。どうやらライムのお陰で、首の皮一枚繋がっていたようだ。周囲の状況的に古内はそう判断した。

「ほいっと。で、交渉とかできるか？」

立ち上がり、この村の村長と思われる小鬼に話しかけながらステータスを除く

・ 小鬼

・ L v 7 6

迷宮込みの人間界でも滅多にお目にかかるない、小鬼とは思えない高レベルである。そして途中で妨害したのか、スキルは見られていたかった。

「すまん、つい出来心で……」

干渉された事に気が付いたのか、不快そうにする村長に謝る古内。どうやらこのレベルとなると、大抵の干渉は気づかれる様だ。

「で、話なんだが。殺さないでいてくれてありがとう。俺たちと仲良くしないか？」

古内の言葉に嫌そうな顔は消えない。後ろで控えている小鬼たちも同じだ。

「俺こういうの作れるけど、どうよ？」

自慢の短剣を取り出し、村長に見せる。そして追加で、どんどんと自作の道具や設計図も近くにあつた机の上に並べていき、どうだと小鬼たちを見る古内。

「他にも色々作れるぞ。アイデアだつて出せる。だ、だからな、ほら、助けてくれ！」

なんやこいつ、とか、呆れた様子で見つめられる視線に耐えかねて、声が大きくなる。

「まだ死にたくなんだ！せっかく転生してチートやつぽいとか思つてたらそもそもでもないし！人がいない所に飛ばされるし！」

凄まじい悲壮感を漂わせて、次々に言葉をぶつける。それを呆然と聞いている小鬼たち。

「魔物強いし！意思疎通取れる奴なんて殆どいないし！一人じや虚無感が凄いんだよ！頭がおかしくなる！だから友達になつてくれ！」

悲痛な叫びを聞いた小鬼たちは、どうしたものかと悩む。自分たちと似たような存在であり、別に脅威でも邪魔でもないし、素材にも食材にもならないのだから、見逃す分には構わない。だが一緒にいさせてくれは困る相談だからだ。

「せめて何かしら友好関係を結ばせてくれないか？取引からもでもいい、用意できるものは何でもしよう！」

悪感情を感じられない戸惑いを感じ取つた古内は、ここぞと言わんばかりに話をねじ込む。

「早速友好の印に、この中から好きなのを選んでくれ！いくらでもいいぞ！」

出した道具たちを小鬼に見せびらかし、チラリと横目で見た少しの興味も見逃がさずに、テンポよく説明を始める。その事により、この場の流れは古内を中心に流れ操作られていた。

（そしてゆくゆくは言葉も文字も浸透させて、人化薬を作つてな……）

古内は興奮し怪しいニヤニヤがでそうになるが抑え、それを笑顔に変えてスラスラと話を進めるのだつた。

あれから一ヶ月

あれから一ヶ月がたち、無害さのアピールや泣き騒しや同情を誘つての好感度？稼ぎが上手く行き、どうにか村の中に納品目的で入れるようになつた古内は、道具の納品のために村長の家に出向いていた。「これが納品物です。どうですか？いい武器たちでしよう？」

そう言い、村長を中心に村で武器や装備を作つている小鬼たちが、机の上に並べられた品を手に取つて見ていく。

「ここじや珍しい金属製の武器ですぜ。へへ、どうですかい、村長さん？」

ニコニコとした笑顔で、まるで悪徳商人のように武器の説明をする古内。ここ的小鬼たちは、金属製の武器を使つておらず、魔物製の装備や武器を使つていてるのだ。そこに自信作を出したのだ。

「あの時は見せるだけが限界で大した数は渡せなかつたけど、今回は村全部に行きわたらせられる数の武具を用意しやしたぜ」

ライムも手伝つてくれたとは言え、満足のいく品を百個以上も用意するのは苦労していた。なので失敗できないと、ゴマスリの如く手をさすりながら、この一ヶ月の事を思い出す。

（嫌われない程度に村に何度も足を運んでよかつた。村のみんなに顔も覚えてもらつたし、警戒心はあるがここまでこぎ付けられた）

あの後見逃してもらえたものの、「もう近づくなよ」的な雰囲気を喰らつたが、そんな事にはへこたれずに村に何度も足を運んでいた。（最初は大変だつたな。俺の事を知らない奴からボコられたり、追い払われたり、ライムが居なかつたら逃げ出せなかつたかもしれない）適度にボコられたり、追い払われたり、そのまま森の中で放置され魔物に襲われたりと何度も死にかけたが、それもすべてライムのお陰で何とか生き残る事に成功していた。

（仲良くなろうと思つて、狩りに出てた小鬼たちにも出会いに行つたが、普通に攻撃してくるし、説得大変だつたな。まあこうやって外堀を埋めるのも大切な事だ）

偶然を装つて小鬼たちと接触し、仲良くなろうともしていた。勿論最初は攻撃されていたが、最近は挨拶する程度には仲良くなつていた。だが古内は知らない、変な目で見られていたり、避けられている事に。

（そしてここまでやつて來た！俺を受け入れてくれたのだ！）

いや違う。しぶとい古内に根を上げて仕方がなく迎え入れたのだ。今も変な動きをしようもんなら即座に攻撃できるようにならざれでいる。能天気な古内とは違いライムは、その事に気が付いており、静かに主人を守つていた。

「つと、どうです？いい品でしょう？」

妄想に耽つてゐる所をライムに戻され、品の拝見と話し合いが終わつたらしい村長たちに話しかける。その顔は何とも言えない顔だ。どうやら、持つてきたものが粗悪であれば放り出す氣でいたらしいが、感心を持つるほどいいものだつたので、対応に困つているようだ。「定期的な納品とメンテナンスからでいいんで！」

悪意はなくともどこか嫌な感じがする変人とは付き合いたくないのか、判断を済る村長に「ヤバい！」と感じた古内は、乗り出してそう迫る。

「どうぞ！ぜひ！うちに契約してください！」

頭を机にぶつける勢いで下げる。いや、ぶつけてゴンツ！と鳴つて、ライムに治してもらつてはいる。その勢いに負けたのか、疲れた顔をした村長は了承の意を古内に伝えていた。

「あ、ありがとうございます！」

それに喜んだ古内は、お礼を言つて話の続きを進めるのだった。

あれから三ヶ月

あれから三ヶ月。古内は村の一員のように馴染み、村人たちとも仲良く狩りに行つたり、村の仕事を手伝つたりと、親睦を深めていた。

「さて、模擬戦と行こうか。本氣で来いよ」

目の前には、紋章の付いた剣を持った小鬼があり、周囲はザワザワとしていた。あの剣は、古内の協力の下作り上げた魔導が付与された魔銀製の剣だ。今回は、戦闘訓練ついでに、この剣の性能を確かめるために古内が名乗りを上げてこうなっていた。

「おつと！ はええ！」

小鬼は素早く距離を詰め剣を突き出してくる。それを寸前で避けた古内は、今まで小鬼たちが使つていた魔物製の牙でできた短剣を反撃に振るう。

「避けるよな！」

だがその一撃はギリギリで避けられ、難ぎ払いが古内を襲つた。それを滑りこけるように思いつ切り地面を蹴り距離を取る。

「ふ〜隙がねえぜ」

古内が体勢を整えている内に相手は構え直しており、次は上から脳天目掛けて剣を振り落とし

「これも中々だな！」

受けきれないと判断した古内は、短剣で受け流しづらしながら空いた手で拳を叩き込んでいた。

「おつと！ 浅かつたか！」

一瞬怯んだが、追撃を擊つ暇なく雑に斬撃が放たれる。それに距離を取りながら短剣を確認する古内。

「一発受けただけでこれかよ……」

強化していたはずの短剣のは部分が少し削れ、冷汗を流す。それと同時に

「どうです皆さん！ これを見てください！ 一発でこの威力！ すごいで

しょう！」

チキンと宣伝しておく。

「お？まだやるか？中途半端だもんな」

だがまだ訓練は終わらない。まあそりどよなど感じ取った古内は、そのまま短剣を構え、一気に距離を詰め短剣を振るう。しかしそれを見切つた小鬼は、最低限の動きで避けて、両者の激しい攻防が始まる。（俺が協力した甲斐があるな。この短剣とはホントに性能が違すぎる！）

後手に回るわけにはいかないので先手を打つてギリギリでどうにかしているが、同レベルの相手がより強い武器を使つていればこうなるだろう。

（ここで見比べて確信したが、魔物の素材は上手く使えば強いが癖が強い。それに比べて金属製の武器は単純に強くなりやすい）

幸威が使つている剣は別に属性を付与したり、特殊な力など付与されていない。ただ単純に耐久や斬味などの基礎スペックを上げ、取り扱いがいいだけだ。だがそれが凄く強い。斬り殺せるのであれば相性など考えずにこれを使えばいいほどに強いのだ。

「つ!?あぶね！」

斬り上げを躊躇したが、斬撃波は地面を抉つている。

「強化したな」

力を流し込めば紋様である術式がさらに性能を引き上げてくれる。こうやつて軽い斬撃を放つことだつて可能なのだ。

「じゃあこつちは斬味と刺突だ！」

本格的に古内も力を回し、この短剣の特性である斬味と刺突を強化する。それで剣の腹に突き刺す。

「よし！勝った！」

剣は欠けながら弾かれ、態勢を崩した小鬼に拳を叩き込む。それにより勝利宣言した古内が堂々と勝つてしまつたのだった。